

41551

教科書文庫

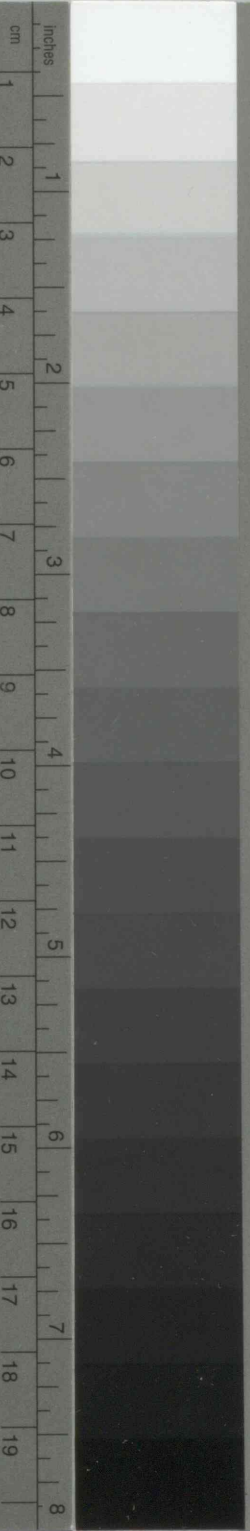
4
810
41-1937
200030 1471

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



375.9  
De14  
資料室

新編國文讀本  
改制版卷四





日二十二月二十年二十和略  
濟定檢省部文  
科語國校學業實·科文漢語國校學中

千田憲編

新編國文讀本

改制版

東京右文書院藏版

資 料 室

375.9  
Se14

中學明善校  
二五四七

藤井保





「木の實草の實」参照

(軍山紫藤齋)

山葡萄

廣島大學圖書印

廣島大學  
教  
30750  
印



新編國文讀本

改制版

卷四

目次

一	忠君愛國	芳賀矢一	一
二	よもの海	阿部次郎	七
三	雑草	永井潜	一六
四	競技精神	薄田泣董	二一
五	鉦叩	白鳥省吾	二六
六	秋晴	上司小劍	二八
七	秋	前田晃	三四
八	私の禮拜		

目次

新編國文讀本  
改制版  
卷四

芳賀矢一



〇九	小蛇の疵	新井白石	三九
〇一〇	木の實草の實	森田恆友	四三
〇一一	武藏野	國木田獨步	五〇
〇一二	翼	吉江喬松	五八
〇一三	夕ぐれの時はよい時	堀口大學	六五
〇一四	形	菊池寛	六九
〇一五	文章の道	島崎藤村	七五
〇一六	歌ごころ	北原白秋	八二
一七	宿り木	「俳句」	八八
一八	幼時の正月	落合直文	九〇
〇一九	蘆庵と君平	瀧澤馬琴	九六
〇二〇	岡井仁右衛門へ	蒲生君平	一〇七

りときか

二一	鷹が渡る	野村傳四	一一一
二二	皇軍の面目		一一八
二三	元寇	三宅雪嶺	一二六
二四	停車場で	小泉八雲	一三七
二五	創始者の苦心	杉田玄白	一四四
二六	新聞の話	鈴木文史朗	一五二
二七	國史に返れ	徳富蘇峰	一六七
二八	自國語	上田萬年	一七一
二九	死して惜しまるる人となれ	嘉納治五郎	一七五

附録 文法表





芳賀矢一  
福井市の人、國文學者、文學博士、東京帝國大學名譽教授、國學院大學長、昭和二年歿、年六十一。

現つ御神  
高御座

### 新編國文讀本 改制版 卷四

#### 一 忠君愛國

芳賀矢一

「開闢以來君臣の分定めり。」とは有史以前から我が民族の腦裏に浸み渡つた思想で、天孫の皇裔が代々帝位を継ぎ給ひ、臣下萬民はこれに服従せねばならぬものである。事は、動かすことの出来ない國風である。畏くも、天皇は現つ御神とあらせられて、高御座はるかに人間の上におさせられるのである。「かみ」といふ語は、神上髪に通ずる語で、總て上にあるものをいふ。この「かみ」といふ思想は、



太古から今日まで、常に我等日本人が皇室に對して抱き奉るもので、同族中から成上つた帝王に支配される外國臣民の感想とは、大いに差別がある。されど、國民が皇室に對するのは、神として恐れ畏み奉るばかりでない。皇室を公おほやけといふのは、大家の義で、これに對して我等はこやけ小家である。即ち皇室は我等の本家であらせられるといふ思想で、この中には親愛の意味がある。世の常の統治者と被治者との間柄ではなく、心の底から上下互に親睦するのである。八百萬の神が天孫を君と仰いで、その事業を翼贊するのは、恐れ多いが、大本家の統領として尊敬して居るのである。親子の關係が成

被治者

親睦

翼贊

まめごころ

立つて居るのである。親子の愛情は人の至情即ち「まごころ」で、「まごころ」は即ち忠である。忠といふ漢語を國語に譯すれば「まめごころ」で、畢竟「まごころ」である。忠といひ、孝といふのも、我が國では別物でない。この「まごころ」を以て皇室に對するのが、我が國民の習である。神と尊び、神と畏れ、親と頼み、親と睦ぶから、勅命とあれば、如何なる事にも従ひ、如何なる事をも行ふ。大和魂といふのもこの「まごころ」で、元寇の時に大敵を逐拂つたのも、この「まごころ」である。この「まごころ」こそ、舉國一致以て外敵に當るといふ精神、皇室を保護し、皇室を維持しようとする精神で、困難のある毎に現れて、世界を驚



精髓  
もつてい

かす事業をするのである。  
「まごころ」即ち皇室に對する忠といふ思想は、武家時代には主従の連鎖となり、武士道の精髓となつた。即ち己の主人には「まごころ」を以て仕へて、身命を惜しまず、事ある時には馬前に討死するのが、家來たるものの本分である。この武士道はもと武士の守らねばならぬものであつて、これを以て町人以下を律することはなかつたが、其の思想はまた何時しか一般國民の間に擴まり、奉公といふのも、初は朝廷に對する語であつたが、遂には通常の雇人をも奉公人といふやうになつた。

一旦主従の上に移された忠の解釋は、明治の維新と共

律す  
あてはめ

陪臣  
ジギヤ  
直參

に古に復つて、皇室に對するものと限られることになつた。否、この解釋の復古が徳川幕府を倒して、明治の維新を成したのである。維新後は士・農・工・商皆平等になつて、國民一般に兵役に就く事となつた。陪臣・陪々臣の制度は廢れて、いづれも天朝直參の臣となつた。久しく武家で養成した武士道の精神は、天朝に對してのみ捧げられる事となつた。町人百姓の間にまで行渡つたこの國民の思想は、今はその犠牲的精神を以て、國家の爲に身命を抛たねばならぬ機會を見出して、清國にも勝ち、露西亞をも破つたのである。ベルリンの凱旋路の一端に、高さ數十丈の凱旋塔があ



國家的觀念

つて、その上に金色の燦爛たるゲルマニヤの女神の像がある。この女神は獨逸の國家を代表する爲に作られた空想的人物である。これと等しく、英國ではブリタニヤ、佛國ではガリヤといふ空想的人物を設けてある。政體が幾たびも變り、王室が屢交替する外國で、古來の歴史を懷はせ、國家的觀念を養はせる爲には、かやうのものを假設するより外に途がないのであらう。唯我が日本では、國土と皇室とは開闢以來離れることの出來ぬもので、國の爲、家の爲といふことは、同一の意味に解釋される。「朕は即ち國家なり」とは我が國の天皇であつて始めて宣ふことの出來る辭である。

〔國民性十論〕

二 よもの海

明治天皇御製

水鳥

27 櫻田のほりちかければ水鳥のさわく羽音を

きかぬ夜そなき

をりにふれて

39 國のためいのちをすてしますらをのたま祭

るへき時ちかつきぬ

正述心緒

37 よもの海みなはらからと思ふ世になと波風



のたちさわくらむ

故郷

40. 春秋の花に紅葉にこひしきは昔すみにし都  
なりけり

太刀

41. 身にはよしはかすなるとも劍太刀ときな忘  
れそ大和心を

湖上月

43. ひかひとる船もみえけりさゝ波の志賀のう  
らわの秋のよの月

社頭冬月

42. 御神樂の庭火のかゞり影ふけて廣前しろく

月のてりたる

（明治天皇御集）

昭憲皇太后御歌

名古屋にて大演習行はせたまはむと

するころ海上霞といふことを

大みふねうかへむ春と風なきてうちかすむ  
らむ鳥羽の海原

社頭祈世

神風の伊勢の内外の宮柱ゆるきなき世をな  
ほ祈るかな

窓前夏月



夕月夜さすにまかせてともしひもかゝけぬ  
窓のうちそすゝしき

河上霧

秋寒きみたけおろしに朝きりもなかれてく  
たる木曾の山川

犬

乗る人は見しらすなから大路ゆく車にそひ  
てはしる犬の子

寄天祝

ひとむらの雲もかゝらぬ空を見てわか君か  
代をいはふ今日かな

（昭憲皇太后御集）

三 雜 草

阿部次郎

阿部次郎  
山形縣の人、哲學  
者、東北帝國大學  
教授、明治十六年  
生。

去年の秋植ゑたばかりでまだ疎らな芝草の間に、猛烈な勢で雜草が蔓り出した。まだたけの低いうちは、同じ緑の色にまじつてそんなには目に立たなかつたが、たけの延びるに従つて、それが目障りになり出して來た。それで私は毎朝まだ涼しいうちに、朝飯前の運動として草取をすることを思ひついた。この頃になれば、脊の口からしつとりとおりる露が朝になつて益、繁く置いてゐるのを、跣足の足裏で踏む冷たさがいゝ心持である。三四十坪ある芝地の片端から、そろゝと草を取つて行きな

跣足



リズム

がら、考へかけてゐることを考へ進めて行く時、そこには  
 机の前に坐つてゐる時とは又別様のリズムが生れる。  
 固より私の草取は遊戯の一種に過ぎないが、この遊戯は  
 私に、筋肉労働は——特に土を對手にする筋肉労働は、一  
 種特別の労働であることを感じさせる。筋肉労働だけ  
 が労働でないことは言ふまでもない。併しそれは頭の  
 労働とは違つた一種特別の労働である。さうして、それ  
 はあらゆる人にとつて必要な労働であつて、或程度まで  
 この労働と接觸する事を怠る時、恐らくその人の生活全  
 體に或種類の報いを齎さずにはゐないやうな性質のも  
 のである。土を對手にする筋肉労働には、これを無視す

本質的



どくだみ

る者の觸れ得ないやうな、健全な喜びと苦しみとがある  
 であらう。單にこの一點から考へても土地と農業とを  
 忘れた文化が、本質的に人間を幸福にする力があるかど  
 うかは疑はしい。私はかういふやうなことを考へな  
 がら、芝草の間にまじる雑草を抜捨てて行く。  
 芝草の間にまじつて、最も勢力を逞しくしてゐるのは、  
 葉が芝に似てもつとたけ高く延び、根の方に少し赤味を  
 帯びた何とかいふ草である。私は一種の憎しみを持つ  
 て、遠慮なしにこの似せ者を抜捨ててしまふ。異臭を持  
 つてゐるどくだみも亦私の愛惜を受けることが出來な  
 い。併し鐵火箸のやうな諛ひ氣のない莖に、折から淡褐





かやつり草

圓居

色の花ともいへぬやうな花をつけてゐるかやつり草に  
 になると、私の手は前ほど勇敢にこれをむしり取ることが  
 出来ない。さうして愛惜の心を持つて、芝の間にまじる  
 雑草を眺め始めると、そこには何といふ多様なかはいら  
 しい植物の種類が、この狭い空間にその生を營んでゐる  
 ことであらう。丸い葉の柔かなものや、葵の葉のやうな  
 形をして、三四葉集つて、一つの圓居をしてゐるものや、赤  
 味を帯びた小さい莖を横に這はせながら、芝草の透間に  
謙遜な自分の領分を占めてゐるものや、見るに従つて、新  
 しい種類が目について来る間に、淡紫や黄色の小さい小  
 さい花さへ咲いてゐるではないか。私はこれらの小さ

い、かはいゝものを拔捨てるに忍びなくなつて、彼の憎む  
べき贗者だけを漁つて、これを退治して行く。併し、この  
 贗者を根絶する事だけでも容易ではない。大抵取盡し  
 たつもりで一兩日たつと、何時の間にか、彼等は又芝より  
 高くそのたけを挺ててその存在を其處にも此處にも告  
 知らしてゐる。眞晝の光がぎら／＼と照つてゐるうち  
 は、凡ての葉が一樣にその光を照り返してゐるので、それ  
 がそんなにも目立たないが、朝の柔かな光が、草葉に置く  
 露を目立たせてくれる時には、露を宿して白銀色を帯び  
 たその葉は、とても自分を隠すことが出来ない。かくて  
 又私にはその朝の仕事が與へられるのである。(北郊雜記)



四 競技精神

永井 潛

永井 潛  
廣島縣の人、醫學  
博士、東京帝國大  
學教授、明治九年  
生。  
門閥

競技には、權勢もなく、門閥もなく、情實もなく、財力もな  
い。全く裸一貫の身體と身體とがぶつかつて、眞劍に、誠  
實に、無邪氣に火花を散らして戦ふのである。さうして  
眞に強い者が勝ち、眞に弱い者が負けるのである。これ  
くらゐ如實に、端的に、徹底的に眞を發露するものはほか  
にない。随つて、競技が眞理を愛する者、誠の道に従ふ者  
に取つて無上の喜びであることは申すまでもない。か  
くて眞を冀ふ希臘人をしてスポーツの國民たらしめた  
のである。

如實  
端的  
徹底的

ヒロンイ  
ギリミヤ  
スポーツ  
フットボール  
アリストテレス

平等一如

龍挈虎攫

思ふに、競技には年齢の相違もなく、身分の高下もなく、  
職業の差別もなく、見る者も、見らるゝ者も、悉く皆同一の  
場所で、同一の嗜好の下に打寄つて、我も人も平等一如、悉  
く皆清い、美しい趣味のために融け合つてしまふ。この  
意味に於て希臘人は甚だ競技を好んだのである。競技  
は善を求むる人間の本性に對して、一道の力強い光明を  
與へるものと言はなければならぬ。何となれば、競技  
を行ふに際して、人間本然の徳性即ち善の性質が迸り出  
づべき多くの機會が恵まれるからである。雪を凌ぎ霜  
に耐へて、凜として咲き出づる梅の花にも、優にやさしい  
香があるやうに、血涌き肉躍り、龍挈虎攫、火花を散らして



滾々  
謙讓

闘ひつゝある間にも、自ら競技道德の發露がある。その間に滾々たる友愛の情が湧き、懐かしい謙讓の徳が流れ出る。

関

満場関として聲なく、固唾を呑み息を凝らして控へて

凜々

ゐる幾千の應援者、幾萬の觀客の前に、凜々しく立竝ぶ選手を見ては、戦はざるに既に早く涙ぐましい氣分が湧く。應援者が選手の心に感激する時、勝つも涙、負けるも涙、この温かい涙の中に、一切の世間的、功利的の利害得喪を超越した純眞無垢の情緒の中に、我も人も思ふさま浸ることが出来るのである。かゝる清い享樂、純な氣分は、現今、競技を措いて他に何物を以て代へることが出来るであ

功利的

無垢

せち辛い

齷齪

らうか。文化が進むと共に生存競争が愈、烈しくなり、うき世の中が益、せち辛くなつて來る今の時に於て、暫時なりとも、かういふ齷齪たる世の塵から脱れ出て、この綺麗な、無垢な境地に心を遊ばせることが、どれだけ善を冀ふ人間の本性に、大いなる慰安と光明とを與へるであらうか。善を希求する希臘人が、いたく競技を喜んだのは、當然の事であつた。

涵養

電光石火

競技によつては、なほ幾多の徳性が涵養される。個人と個人と對立して技を争ふ時、眞に電光石火、寸分の隙も許されない。かくの如くして勇氣、果斷、克己、忍耐、敏捷、自信、努力等、人間が人間として世に處し、事に當る上に、最も



相互扶助

大切な幾多の徳性の養成せらるべき機會が、競技によつて恵まれる。更に又、團體競技を行ふに當つては、協心節度責任義務服従といふやうな、人間が社會生活をなし、相互扶助を行ふ上に於て、缺くべからざる幾多の麗しい徳性を培ひ得るのである。かくの如くして、競技によつて友情を高潮すべき機會が與へられる。そしてこの事が、一國家として、一民族として、その隆昌進運を來たす上に、どれだけ大切であるかは、今更言ふを俟たないのである。

（人及び人の力）

五 鉦 叩

薄田 泣菫

薄田泣菫  
名は淳介、岡山縣  
の人、詩人、明治  
十年生。

私達の身近く使つてゐる道具で、これまでは何の見どころもなく思つてゐたのが、ふと氣が附くと、眼の届かなかつた邊に棄て難い趣があるので、今更のやうにそれに心を惹かれることがあるものだ。

丁度そのやうに、仕事や考へごとに疲れた頭を持上げて、何心なくあたりを見廻した時などに、これまで思ひもかけなかつた、しんみりとした雰圍氣を自分の周圍に感じて、覺えずほろりとさせられる瞬間がよくあるものだ。今日正午過ぎ、私は讀耽つてゐた書物にも飽きたので、

雰圍氣





木犀

匂の動き

居ずまひ

日當りのいゝ縁側に出て、其處にあつた籐椅子に身體を  
 投出した。今までつひぞ氣にも留めなかつたが、あたり  
 の大氣は水のやうに澄みきつて静かだつた。時折木犀  
 の匂がたよくとそこらに漂つて來たが、霧の降るやう  
 に一足毎にしんみりとした冷たさを撒散らして行くそ  
 の匂の動きが、一層あたりの静かさを深めて行つた。何  
 か嚴かな式の始るのを待つてでもゐるやうに、庭前の立  
 木も、草花も、そこらに散らばつた落葉も、また部屋の内の  
 いろんな道具も、きちんと居ずまひを直し、固唾を呑んで  
 身動き一つしなかつた。  
 「静かな日だな。こんな日には……」

感覺  
憂鬱

金屬性

私は口の中で、何か言はうとして、次の言葉を忘れたや  
 うに、そのまゝ黙つてしまつた。そして自分の持つ凡て  
 の感覺を受身に、いゝ氣持になつて、この静かさの中に浸  
 つてゐた。青白い魚の腹に感じられるやうな憂鬱と冷  
 たさとが、私の額から、手のひらから、また足の裏から傳つ  
 て、心の奥までも擴がつて行くやうに思はれた。  
 「ちん……ちん……ちん……ちん……ちん……ちん」  
 何處からともなく、金屬性の細かい聲が聞え出した。  
 黄金の盤さらの上に、小粒の寶玉を一つ一つ少しの間を置  
 いて滴らすやうな響で、その寶玉の粒々は、ちん、ちんとそ  
 れぞれの美しい音を立てて轉り落ちたかと思ふと、魔物



とんぼがへり

襲

か何かのやうに盤の中でとんぼがへりを打つて、そのまましつとりとあたりに垂れてゐる「静寂」の重い天鵞絨の襲に紛れ込んで行くのだ。

「ちん……ちん……ちん……ちん……ちん……」

小さな寶玉の粒々は、小止みなく金の盤に轉り落ちてゐる。その金屬性の澄みきつた響は、冷たい螢の光のやうに絶えず光つては消え、光つては消えしなから……。

簡素

鉦叩



何といふ静かな、寂しい、簡素を極めた聲だらう。問ふまでもなく鉦叩が鳴いてゐるのだ。蟲はそこらに散らばつた落葉の下か、明り障子の棧の蔭かに隠れてゐるらしかつた。だが、私が一足その方へ

敏感

近づきでもすると、敏感な彼は直ぐに鳴きやむに相違なかつた。子供の頃から、捜しても捜しても捜しきれなかつたこの蟲は、私にとつては、一つの不思議な存在に外ならなかつた。

「ちん……ちん……ちん……ちん……」

信心な念佛行者が、薄暗いお堂の中でつゝまじやかに祈念を凝らす折のやうに、蟲は唯もう一心に、ちん、ちんと鉦を叩いてゐる。

鉦叩は、何を祈り、何を歌つてゐるのだらうか。

（樹下石上）



六秋 晴

白鳥省吾

白鳥省吾  
宮城縣の人、詩人  
明治二十三年生。



あけび

せうらぎ

秋空晴れて

峠の路は露にぬれ、  
漆の葉緋と燃えて、  
あけびは熟し、栗もこぼれる。

峠を下りるわたしたちに、  
沿うて流れる谷間の水は、  
深い樹立の奥にせうらぎ、

ぶなの樹に猿が遊ぶ。

炭を負うて来る逞しい炭焼の女、  
路を避けつゝ珍らしげに、  
山のかなたに反響する歌は、  
先發の人々の聲か。

あゝ、急がうよ。  
秋の風さわやかに、  
谷間の水も歌ひつゝ、  
人里を慕ひゆく旅ごころ。



上司小劍  
名は延喜、奈良市  
の人、小説家、明  
治七年生。  
凋落

### 七 秋

カミシカサ  
上 司 小 劍

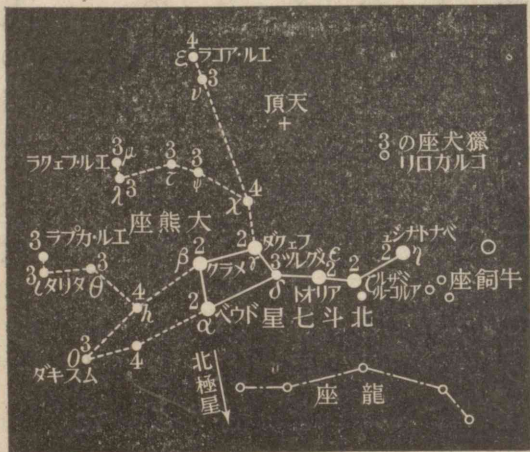
秋は物の凋落を意味するやうに、昔から人々の頭を支配して來たけれど、凋落の裡に復興の氣が溢れてゐるのを見逃すことは出來ない。

澄みきつた大氣……それはひとり秋の有する寶ではないか。山も野も皆一つ一つ磨きあげられたやうに鮮かな光を放つ。遠くにあつた山は近くに引きよせられた如く、近くの野はいよ／＼近く呼べば應へんばかりである。

秋晴の日に赤蜻蛉の飛交ふのを見るのは、風情のある

融和

恆星  
惑星



星 七 斗 北

ものだ。秋の太陽は春の太陽よりも人に優しい。日月に親しみ、星辰に親しみ、天體と人間とが融和するのも秋の特色である。宵の明星の美しく柔かい光が、先づ夕涼みの客に親しむ。團扇片手に顔を掩うて、お星さま、ばあ、みない、みない、ばあ、を、宵の明星に向つてしてゐる幼児の姿も愛らしい。天體の鮮かに仰がれる秋の夜の美しさ。星の名も二つや三つは覚えてゐて、恆星と惑星の區別く



らゐは誰にでも出来る。北斗七星を先づ數へて、次には天の川を見る。

荒海や佐渡に横たふ天の川

芭蕉

本名は松尾宗房、伊賀國(三重縣)の人、俳人、元祿七年(一六六〇)歿、年五十一。

情趣

鳴立つ澤

「心なき身にもあはれは知られけり 鳴立つ澤の秋の夕暮」

西行

俗名は佐藤義清、鎌倉時代の歌僧。

の芭蕉の名句も、もとより初秋の情緒である。古來の詩人といふ詩人は、皆天體に親しみを持つてゐる。遠い遠い月や星をば、地上の動物や植物のやうに自分の友だちとして見る。牽牛織女の話など、如何にも人と天體のゆかしい融合を語るものではないか。これも秋の情趣の一つであらう。

寂しみを主とする日本の詩人は、殊に秋の天地に於て活躍してゐる。鳴立つ澤の秋の夕暮の西行法師や、芭蕉

芭蕉野分して

「芭蕉野分して盥に雨を聴く夜かな」

枯木寒鴉……

「枯枝に鴉のとまりけり秋の暮」

野分して盥に雨を聴く芭蕉など、皆秋の詩人と稱し得る。枯木寒鴉の寂しみに生きる芭蕉は、秋といふよりも寧ろ初冬の情趣に生きた詩人と言はなければならぬ。が、彼の讚美した時雨、枯野など、俳諧の季に於ては冬に屬するけれど、情緒の上からはどうしても秋である。澄みきつた、さうして寂しみのある秋といふ時季あるが故に、よく生きて來たとしてもいはなければならぬ詩人が日本には多い。

天體の一つとして最も我々の世界に近い月は、昔から多くの詩人によつて讚美された。わけても東洋の詩人は、月に向つて感傷的な言葉を投げてゐる。さうしてそ

感傷的



明月を抱いて

「挾飛仙以遨遊、  
抱明月而長終。」

蘇東坡

名は軾、字は子瞻、  
唐宋八家の一。

(西曆一〇三六—一一〇一)

池をめぐりて

「明月や池をめぐりて  
夜もすがら」

詩趣



秋

月

れがすべて秋に於てである。月といへばもう秋のものといふ氣がするではないか。「明月を抱いて……」の名句を、赤壁の賦に残した蘇東坡の秋を讚美した心と、我が芭蕉翁が深川の庵室に明月を仰ぎつゝ、たゞ一人池をめぐりて夜もすがらの寂しみを歌つた心とは、同じやうな詩趣である。

星辰の鮮かに仰がれる秋の夜には、巷の天文學者がなかく多くある。我々が天體に

絶對自由  
軌道

對して絶えず考へてゐることは、あの自由な組織である。毫も個々の自由を束縛されずに、殆ど絶對自由の中に、一定の軌道を巡つてゐる星の姿が羨ましい。あれに比べると、地球上の人間の生活の不自由さ、だらしなさ、……そんなことを考へるのもまた秋の夜の感傷の一つで、澄みきつた空なればこそ、天體に對して讚美の聲が起るのである。天體の讚美即ち秋の讚美であらう。(中央公論)



前田 晁  
山梨縣の人、文學者、明治十二年生。

### 八 私の禮拜

前田 晁

すはえ

私の生れた家では、屋敷の東北の隅に屋敷神を祀つてある。小さな石の祠で、その傍には大きな梅の老木がある。幹は半ばは朽ちてうつろになつてゐたが、それでも春の氣色がめぐつて來ると、必ず花を開いて芳しい香を放つた。そして根もとからは更に別のすはえが出て來て、年を逐うて眞直に伸びて行つた。

私は子供の時分、元日とか、自分の誕生日とか、一月二十五日と六月二十五日の天神様の祭日とかには、朝未明に起きて、顔を洗ふと、必ず袴を著けて、その屋敷神様へお參

露の藪

感應

儒臣

りするやうに定められてゐた。

家から其處まで行くには、池の傍を通つて、屋敷の中を貫いて流れてゐる小川を渡つて、桃の木や杏の木や柿の木の下を通らねばならなかつた。柿の木の下には、露が作つてあつて、春の初ならば、其處に青い小さい露の藪が幾つも數へられた。

私は祠の前へ行くと、低い石段の下に立つて、學問が出來るやうに、優等が取れるやうにと手を合せて拜んだ。

私は勿論感應のあることと信じてゐた。

併しその時分の私は、まだ天神様が菅公で、その菅公は身を儒臣から起して、一世の政治家となつた偉い人であ



天命

つたとか、讒せられたが少しも怨まず、天命を筑紫の果に  
楽しんで身を終られたとか、さういふことは全く知らな  
かつた。屋敷神様は自分の家の先祖だといふところか  
ら、私は天神様を自分のお祖父さんくらゐに思つて懐か  
しんでゐたのである。

寶前

私が今でも天神様の寶前に立つた時に、禮拜すること  
を忘れないのは、この感情がそのまま、残つてゐるのであ  
る。菅公こそ、古今の人物中で、最も懐かしい人として私  
の胸の中に生きてゐるのである。  
一體今の世の中の人は、學問をしても、その學問をば一  
つの知識として置くだけで、自己の生活の一部、即ち自己

標置

有機的

殊勝

行住坐臥  
造次顛沛

そのものの一部としようとは思つてゐないやうである。  
或人物を崇拜するとか、或理想を抱くとかいつても、それ  
は自己を離れて、遙か向うの方の高い所に標置してある  
だけで、崇拜するもの、理想とするものと、崇拜されるもの、  
理想とされるものとは、何等有機的の關係もなく、離れ離  
れになつてゐるやうである。それを譬へてみると、ちや  
うど神社の前へ行つた時ばかりは、殊勝らしく拍手して  
拜むけれど、不斷は平氣で悪いことをやつてゐる人の心  
が、その實は全く神を離れてゐるやうなものである。私  
はそれよりも寧ろ、神社の前ではよしんば祈らずとも、行  
住坐臥、造次顛沛、だも神を心から離さぬことを心掛けた



對象  
無内容

いと思ふ。私は理想を抱くにしても、古人を崇拜するにしても、學問をするにしても、凡てこの意味で行きたいと思ふ。學問を我が知識のみとして満足し、古人を我が崇拜の對象のみとして満足し、理想を我が道程の目標のみとして満足するやうでは、畢竟無内容の形式に煩はされるばかりで、本當の自分の生活の爲には何の効果もないことになるであらう。それではならぬと私は信じてゐる。

十八歳(翌一)

### 九 小蛇の疵

新井白石

當時天下に雙なしなどいふ富商の子の、學ぶ友となり



新井白石  
名は君美、江戸の人、六代將軍家直の侍講となりて政治を輔く、享保十年(三三三)歿、年六十九。  
富商  
河村瑞軒をさす、元祿十二年(三三九)歿、年八十二。

ぬること出來しに、その子の言ひしは、「我が父なるものの見参らせて、必ず天下の大儒ともなり給ふべき御事なり。我が亡兄の娘の候ふなるにあはせ参らせ、黄金三千兩に求め得し宅地をもて學問の料となして、物學び給ふやうにと某が心のやうに申せ。」とこそ侍れ。」といふ。



我このことを聞きて、御志のほど忘るべからず。我むかし或人の申ししことを聞きしに、夏の頃靈山リョウゼンとかに遊びし者どもの中に、池に足浸し居けるに、小しきなる蛇さの來たりて、その足の大指を舐むるあるが、忽ちに去りてはまた忽ちに來たりて舐む。かくするがうちに、その蛇やうやうに大きくなれるにや、後にはその大指を呑むばかりになりたれば、腰よりさすがを取出して、刃の方を上になして大指の上に當てて待つ。また來たりて大指を呑まんとする所を、あげさまに刺斬りたれば、うしろさまに飛去るほどに、家へかけ入りて障子をさす。伴なひし者ども、何事にやといふほどこそあれ、石走り木僵れて、地ふ

さすが

るふこと半時ばかり過ぎて後に、障子を細目にあけて見けるに、一丈餘の大蛇の、脣の上より頭の方まで一尺餘り斬られたるが、斃れ死にたりといふことなり。そのありやなしやは未だ知らねど、今宣ふことに似たるところの侍るなり。初めその蛇の小しきなりしほどは、わづかにさすがをして刺斬りしところなるが、既に大きくなりしに至つては、一尺餘の疵とはなりしなり。我今身貧しく窮りたれば、人知れる者にも非ず。この身の儘にて、その亡兄のあとを承継ぎなんには、その疵をほ小しきなるべし。若し宣ふところの如く、世に知らるべきほどの儒生ともなりなんには、その疵は殊に大きにこ



然るべき儒生  
黒川某、父祖とも  
儒名ありし人。

父

新井正濟、常陸國  
(茨城縣)の人、江  
戸に出で久留里侯  
土屋利直に仕へ、  
重用せらる。延寶  
六年(三三〇)歿、年  
八十二。

折たく柴の記

三卷、新井白石の  
自敘傳。

そなりぬべけれ。三千兩の黄金を捨てて、大疵あらん儒  
生となしたてられんことは、謀を得給ひたりともいふべ  
からず。たとひ刺斬るところの小しきなりとも、我もま  
た疵被らんことを願はず。我かくこそ申したれと答へ  
給へ。といひたり。後に聞けば然るべき儒生の、その娘に  
あひ具せしなり。

このことをも、父にておはせし人に語り申しければ、珍  
らしからぬことなれど、よき諭にもありつるかな」と笑ひ  
給ひたりき。

―折たく柴の記―

森田恆友

埼玉縣の人、洋畫  
家、昭和八年歿、  
年五十二。

ほゞづき



老緑

可憐



### 一〇 木の實草の實

森田 恆友

五六年前の春に、子供が田舎へ行つて、祖母にほゞづき  
の苗を頂いて來た。それを庭の一隅に植ゑて置いたら、  
その秋から赤いほゞづきが、狭い庭の秋を彩つてくれる  
やうになつた。三本が五本に、五本が十本にといふ風に  
繁殖して、まだすべての庭木が老緑である下に、ほゞづき  
の葉も緑のかげに、ほゞづきの實のみが眞赤に色づくの  
が、數年來の初秋に私を慰めてくれる。その緑の葉かげ  
に垂れる眞紅なほゞづきの袋は、美しくもあり、可憐でも  
ある。





烏瓜

霜葉

同じ眞紅の實であるが、烏瓜の風情は又違つた趣のあるものだ。ほゞづきは軟かい緑のかげに見るのがよく、烏瓜は深緑の森の中、とりわけ樅や檜の葉かげの高いところに、點々として垂れついでゐるのが美しい。田舎の寺の裏庭や、道端の藪の中に、彼が思ふさま、からみ上つて、夏のうちはちよつとも氣の附かない深緑の中に、秋が訪れるに従つて、おやと思ふところに美しい眞紅の玉を點じ出す。彼はほゞづき以上に野趣にみちた秋の色だ。

秋の趣は、古人も「春花秋實」といつてゐるやうに、とくべつ草木の實の美しい時だ。春の花が、色とりとりに美しいやうに、秋の實は、木の實も草の實も、霜葉の美に先立つ

て、それとに美しい彩を現じ出す。そしてこれ等の木の實や草の實の様々は、とりわけ野路や村路に美しい變化を與へてくれる。野路や村路が、長い夏の間あまりに平凡な景色にかくれてゐたから、秋になつてとりわけ美しさが眼立つのだ。多くの小鳥達が野にむらがつて來るのも、あながち好餌を目當に集るばかりでもないかにさへ見える。それほど野路や村路は美しく、又可憐になる。

野路を歩いてゐて、私がいづも不思議な美しさに打たれるものは、路傍の畑の葉かげに、眞赤になつてゐる唐辛子だ。平凡な畑の中に、彼が眞赤に酔つてゐる色は、如何



好漢

にも秋の野趣を語る。愛すべき好漢よ、とついその一つ二つを摘採つてみたくなる。秋の強日にかつと酔つたやうな唐辛子、彼はあかくなるだけだが彼の一生の目的らしく見える。素朴の唐辛子よ、と私は彼を愛する。

そろ／＼霜を見ようとする頃の秋の木の實で、好もしいのは、あの珊瑚の珠を附けたやうな落霜紅だ。小春日の武藏野をぶら／＼歩きながら、農家の庭先などに、あの小さい紅の珠玉が、細い枝に群をなして附いてゐるのを見ると、何となしに秋の興が湧くものだ。可愛らしい紅玉の色が、淋しい秋を愛らしく、又賑やかにしてくれるやうな氣がする。柿の實も亦農家の秋を彩る實だが、彼の



秋の興

甕



面白さは、むしろ霜が降りて、木々の葉が落ちてから、蒼空を背景として張つた枝に、點々として附いてゐるのを見上げるのが最も美しい。

柿や栗の實、葡萄の面白さは、柿かへつて又折採つた一枝や、一房がよいことが多い。まだ色づかぬ青柿の一枝を折つて來て甕に挿した面白さ、こぼれさうに口を開けた、いがの幾つかを附けた栗の枝、又は蔓のまゝに採つて來た葡萄の紫玉



色感



栗

の房を、無造作に卓上に置いて眺めてみると、それは色感の面白さでなく、主として彼等の形、彼等の様子の面白さだ。優しい秋は葡萄の房が、素朴な秋は栗の實が、頼もしい秋は青柿が、それらに受持つて現してあるかに見える。様々な秋のすがたが、それらの彼等に現れてある面白さ、それは彩の秋ではなくて、風情の秋ともいへよう。

秋晴の野、少し山手に近い野路など歩いてゐて、ふと見る傍の藪の上に、ぼつかりと口を

開けたあけびに出あつた時の心持は、全く秋の嬉しさと  
いへよう。毎日眺めてゐる庭の柘榴でさへ、幾つかの實  
を附けてから、それが口を開けるのは楽しく待たれるも  
のだが、野路を歩いてゐて、思ひも附かぬ目の先に、幾つか  
のあけびが、ぼつかりと開いた口へ、秋の日を浴びてゐる  
のに出あつたとしたら、誰でも子供のやうに、驚きと嬉し  
さとが同時に心を打つであらう。秋の實の彼等の風情  
は、花のやうに優しくはないが、多くの彼等は、正直で、素朴  
で、美しい。秋の自然の美の中で、彼等が一番正直なこと  
が、私は大好きだ。

（現代）



國木田獨歩  
名は哲夫、千葉縣  
の人、小説家、明  
治四十一年歿、年  
三十八。  
絶類

## 一一 武藏野

國木田獨歩

昔の武藏野は、萱原の涯なき光景を以て絶類の美を鳴らしてゐたやうに言傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏野の特色といつてもよい。木は主に楡の類で、冬は悉く落葉し、春は滴るばかりの新緑萌え出づるその變化が、秩父嶺以東十數里の野一齊に



國木田獨歩

行はれて、春夏秋冬を通じ、霞に、雨に、風に、霧に、時雨に、雪に、緑蔭に、紅葉に、さまざまの光景を呈するその妙は、ちよつ

秩父嶺  
秩父山脈、埼玉縣  
秩父郡一帶の諸峯  
の總稱。

珍重

舞うて

沈靜

と西國地方または東北の者には解しかねるのである。自分は屢思<sup>シ</sup>うた、若し武藏野の林が楡の類でなく、松か何かであつたら、極めて平凡な、變化に乏しい、色彩一樣のものとなつて、さまで珍重するに足りないだらうと。楡の類だから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨がさゝやく。風が叫ぶ。一陣の風が小高い丘を襲へば、幾千萬の木の葉高く大空に舞うて、小鳥の群かの如く遠く飛去る。木の葉が落ち盡せば、數十里の区域に互る林が一時に裸になつて、蒼ずんだ冬の空が高くこの上にかゝり、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段澄みわたる。遠い物音が鮮かに聞える。



傾聽  
諦視

すだく

だみ聲

自分は十月二十六日の日記に、林の奥に坐して四顧し、傾聽し、諦視し、默想す。」と書いた。この耳を傾けて聴くといふことが、どんなに秋の末から冬へかけての今の武藏野の心に適つてゐるだらう。秋ならば林の中より起る音、冬ならば林の彼方遠く響く音。鳥の羽音、囀る聲。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ聲。叢の蔭、林の奥にすだく蟲の音。空車、荷車の林を廻り、坂を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹶散らす音。これは騎兵演習の斥候か、さなくば夫婦連で遠乗に出かけた外國人である。何事をか聲高に話しながら行く村の者のだみ聲。それも何時しか遠ざかつて行く。獨り寂しさうに道を急ぐ女の足音。

幽寂



もしもそれ時雨の音に至つては、これほど幽寂なもの

遠く響く砲聲。隣のエでだしぬけに起る銃音。自分が

一度犬を連れて近處の林を訪ひ、切株に腰をかけて書を読んでみると、突然林の奥で物の落ちたやうな音がした。足もとに臥てゐる犬が耳を立てて、きつとそなたを見詰めた。それきりであつた。多分栗が落ちたのであらう。武藏野には栗の樹も随分多いから。



鷹揚

ない。山家の時雨は和歌の題にまでなつてゐるが、廣い  
廣い野末から野末へと、林を越え、森を越え、田を横ぎり、ま  
た林を越えて、忍びやかに通り行く時雨の音の、如何にも  
幽か<sup>し</sup>で、また鷹揚な趣があつて、優しく懐かしいのは、實に  
武藏野の時雨の特色であらう。

人跡絶無

自分は嘗て北海道の深林の時雨に逢つたことがある。  
これはまた人跡絶無の大深林であるから、その趣は更に  
深い<sup>く</sup>が、その代り武藏野の時雨の更に人懐かしくさゝや  
くが如き趣はない。

秋の中頃から冬の初、試みに中野あたり、或は澁谷・世田  
谷または小金井の奥の林を訪うて、暫く坐つて散歩の疲

中野・澁谷・世田谷  
何れも東京市西部  
の地名。  
小金井  
東京府北多摩郡小  
金井村。

星斗闌干  
野分

れを休めて見よ。これ等の物音忽ち起り忽ち止み、次第  
に近づき次第に遠ざかり、頭上の木の葉風なきに落ちて  
微かな音を立て、それも止んだ時、自然の靜肅を感じ、永遠  
の呼吸身に迫るを覺えるであらう。武藏野の冬の夜更  
けて星斗闌干たる時、星をも吹落しさうな野分が凄まじ  
く林をわたる音を、自分は屢、日記に書いた。風の音は人  
の思を遠くに誘ふ。自分はこの物凄<sup>い</sup>風の音の、忽ち遠  
きを聞いては、遠い昔からの武藏野の生活を思ひつゞけ  
たこともある。

熊谷直好の歌に、

よもすがら木の葉かたよる音聞けばしのび

熊谷直好  
周防國(山口縣)の  
人、國學者、歌人、  
文久二年(五三)歿、  
年八十一。



に風の通ふなりけり  
 といふのがあるが、自分は山家の生活を知つてゐながら、この歌の心をげにもと感じたのは、實に武藏野の冬の村居の時であつた。  
 林に坐つてゐて、日の光の最も美しさを感じるのは春の末より夏の初であるが、その次は黄葉の季節である。半ば黄に、半ば緑の林の中を歩いてゐると、澄みわたつた大空が梢々の隙間から覗かれて、日の光は風に動く葉末葉末に碎け、その美しさは言ひ盡されない。日光とか碓氷とか天下の名所はともかく、武藏野のやうな廣い平原の林が、隈なく染つて、日の西に傾くと共に一面の火花を

日光  
 栃木縣上都賀郡日光町。  
 碓氷  
 群馬縣碓氷郡、その峠は群馬縣・長野縣間の境をなす。

大觀

放つといふのも、特異の美觀ではあるまいか。若し高きに登つて、一目にこの大觀を占めることが出来るなら、この上もないこと、よしそれが出來難いにせよ、平原の景の單調なるだけに、人をしてその一部を見て、全部の廣い、殆ど限らない光景を、想像させるのである。その想像に動かされつゝ、夕照に向つて、黄葉の中を歩けるだけ歩くことがどんなに面白からう。

—(獨歩全集)—

夕照



吉江喬松  
孤雁と號す、長野  
縣の人、文學博士、  
早稻田大學教授、  
明治十三年生。

一一一翼

吉江喬松

私は小高い丘の上に立つてゐた。

澄切つた秋の夜の空は紫紺の色を湛へて、無数の星が  
ちか／＼光つてゐた。大空の半圓は遠く野の涯を限つ  
て、仄暗い野の面には低く風が流れて行くのか、藪の枯草  
がかさ／＼鳴つてゐた。大空は胸をあらはして冷たい  
夜氣にふるえてゐた。

私は丘の上の草の中へ腰をおろしてじつとしてゐた。  
すうつ、すうつと草の葉が擦れ合つて、下の野の方からは、  
蟲の聲が聞えて來た。

月の昇る前の東の空には、淡青い光が漂つて、榎の葉の  
落ちた枝が、細い幾本もの指を伸ばして、その光をつかむ  
やうにしてゐた。

何處か頭の上で、さあつ、さあつと空氣を切つて飛ぶ物  
がある。はつと思つて、私は頸をすくめて見上げた。は  
つきり見極められないが、薄黒い鳥の影が列をなして行  
くのが眼にはひつた。さあつ、さあつと翼の音が斷續す  
る。空氣が揺れて、顔へ、頸へ、冷たく當る。と思つてゐる  
と、心が妙にをどるやうで、胸の動悸が高く打ち出した。  
身體中波立つて血がめぐる。どつき、どつき鼓動する心  
臓の響と、さあつ、さあつと空氣を切る翼の音とは、調子を

斷續

動悸



合せて鳴つてゐた。

翼の音が少し遠くなり、微かになつて、その物音の中心が空を滑つて、先へ先へと移つて行くと、冷たい空気は幾重にも幾重にも輪を描いて、波動の中心は次第に大きくなつて、丘の上に、野の草の葉先の末にも及んで行くと、蟲の聲はその波動につれて調子をとり、草の葉は同じく波立つて揺れた。黒い空氣の波の震動、私の心臓もその中に包まれて、ゆるく鼓動を立ててゐた。

ぼうつと野は明るくなつた。森の影が長く黒く、黄枯れた草の上へ敷かれて、蟲はいま眼をさましたやうにあらそつて聲を立てた。

私は月の方へ向つて、胸に深く光を吸込んだ。月の光の下に、瓦の屋根の竝んでゐる都會が見えだして來た。いつもは騒がしい響の聞えてゐる都會が、その夜に限つて何の物音も立てなかつた。たゞ黒く見えてゐるばかりで、焼け跡かなにかのやうだ。

淡青い光を空にひろげて、次第に月は昇つて來た。丘の下野も一層明るくなつて、藪蔭がぼつりぼつり立つてゐるのも見えた。ふるふるやうな水溜も見えた。光の波が、今度は空にも地上にも漲りあふれてゐた。私の身體の細い血管の中までもその波がくゞり入つて、身體全體がすすきと透きとほりでもするやうな氣がする。

漲る



視線

私は暫くじつとして立つてゐた。さあつ、さあつとまた物音が空に聞えて來た。私はまたはつと思ふと、動悸が強く打ち出した。何物かの襲來を受けたやうに、頭を仰向けたが、その物音の姿は見えない。だが、前よりも一層近くその音は聞えて來た。一層低く、私の身體よりも一層低く、丘の中腹を掠めて行くやうだ。

私はその響の來る方へ鋭く視線を向けた。雁の群だ。十羽ばかりの雁が横に並んで、ゆるく羽を搏ちながら翔つて行く。右の端にゐる一羽の鳥が他のものよりも少し先へ出て、時々頸を左右に動かし、頭を高く昂げて勢よく舞つて行く。



(筆波觀井朝) 雁

群鳥の脊を滑つて視線が少し先の草原へ落ちると、其處には舞行く鳥の影が、草原の上を斜に流れて行くのが見える。野の涯の低い空には、大きな星が澄んだ光できら／＼してゐるのも見える。

大きな鳥の一隊の群、荒い羽搏き、動く長い頸、その一團の生命の波動を身近に感ずると、私は怖ろしさと不思議さに思はず聲を立てようとした。我が生が、形の異なつた羽を持ち翼を持つた我が生が、いま眼の前を翔つ



て行く。周囲が暗くなつて、たゞ暗い音の波動だけが、空にも地にも充ちてゐるやうな気がした。暫くたつた。見ると、雁の群はもう稍、遠く隔つて、羽搏いてゐるとも思はれない。たゞ薄黒いものがずん／＼空を流れて行くやうだ。光の波を搔亂し、音と光とが空に亂れて不思議な波動を起し、睡つてゐる地上の草木や、人家の屋根に、奇妙なりズムを響かせて行くのだ。鳥のすぎた後の野原は、またひつそりとして、月の光が、枯草の根元までも、根元の土の小さな塊團かたまりにまでも射しこんで、大地の胸は冷たいその光を飽くまでも吸つてゐた。

―(若き自然)―



(筆作英田和)

暮タの頭渡



堀口大學  
東京市の人、詩人、  
明治二十五年生。

かたはら

一三 夕ぐれの時はよい時

堀口大學

夕ぐれの時はよい時、  
かぎりなく優しいひと時。

それは季節にかゝはらぬ、  
冬なれば煖爐のかたはら、  
夏なれば大樹の木蔭、  
それはいつも神祕に満ち、  
それはいつも人の心を誘ふ。  
それは人の心が、



時にしばし

静寂を愛することを、

知つてゐるもののやうに、

小聲にさゝやき、小聲にかたる……。

夕ぐれの時はよい時、

かぎりなく優しいひと時。

若さににほふ人々のためには、

それは愛撫に満ちたひと時、

それは優しさに溢れたひと時、

青春

それは希望で一ばいなひと時、

また青春の夢とほく

失ひはてた人々のためには、

それは優しい思ひ出のひと時、

それは過去つた夢の酩酊、

それは今日の心には痛いけれど、

しかも全く忘れかねた

そのかみの日の懐かしい移り香。

そのかみ

夕ぐれの時はよい時、

かぎりなく優しいひと時。



夢幻

夕ぐれのこの憂鬱は何處から來るのだからか？  
だれもそれを知らぬ！

(おゝ！だれが何を知つてゐるものか？)  
それは夜とともに密度を増し、  
人をより強き夢幻へみちびく……。

夕ぐれの時はよい時、  
かぎりなく優しいひと時。

—(月光とビエロ)—

菊池 寛

高松市の人、小説家、明治二十二年生。

大剛  
手の者

扱く  
魁殿

陣羽織 (羽織)



唐冠 纓金の兜



けざやかさ

一四 形

菊池 寛

攝津半國の主であつた松山新介の侍大將中村新兵衛は、五畿内・中國に聞えた大剛の侍であつた。その頃、畿内を分領してゐた筒井・松永・荒木・和田・別所など、大名・小名の手の者で、「槍中村」を知らぬは恐らく一人もなかつたであらう。それ程、新兵衛はその扱き出す三間柄の大身の槍の鋒先で、魁殿の功名を重ねてゐた。その上、彼の武者姿は戦場に於て水際立つた華やかさを示してゐた。火のやうな猩々緋の羽織を著て、唐冠纓金の兜を被つた彼の姿は、敵味方の間に輝く許りのけざやかさを持つてゐた。



雜兵

脅威

「あゝ、猩々緋よ、唐冠よ。」と、敵の雜兵は新兵衛の槍先を避けた。味方が崩れ立つた時、激浪の中に立つ巖のやうに敵勢を支へてゐる猩々緋の姿は、どれ程味方に取つて頼もしいものであつたか分らない。又、嵐のやうに敵陣に殺到する時、その先頭に輝いてゐる唐冠の兜は、敵に取つてどれ程の脅威であつたか分らない。かうして槍中村の猩々緋と唐冠の兜とは、戦場の華であり、敵に對する脅威であり、味方に取つては信賴の的であつた。

或日、元服してからまだ間もないらしい侍が、

「新兵衛殿、折入つてお願いがござる。」

と、新兵衛の前に両手を突いた。新兵衛は、

辭儀

おりない  
初陣

念もない

功名心

「何事ぢや。そなたと我等との間に左様な辭儀は入らぬぞ。望といふを早う言うて見い。」

と、育むやうな慈顔を以て相手を見た。

「外の事でもおりない。明日は我等初陣ぢや程に、何ぞ華々しい手柄をして見たい。就いては、御身様の猩々緋と唐冠の兜とを貸してたもらぬか。あの羽織と兜とを著て、敵の眼を駭かして見たうござる。」

「はゝはゝ、念もないことぢや。」

と、新兵衛は高らかに笑つた。新兵衛は相手の子供らしい無邪氣な功名心を快く受入れることが出來た。

「だが、申して置く。あの羽織、兜は、申さば中村新兵衛の



肝魂

哄笑

鎬を削る

端武者

形ぢや。そなたがああ品々を身に著ける上からは、我等程の肝魂を持たいでは叶はぬことぞ。」  
と言ひながら、新兵衛は再び高らかに哄笑した。  
その翌日、攝津平野の一角で、松山勢は大和の筒井順慶の軍勢と鎬を削つた。戦が始る前、いつものやうに猩々の緋の武者が唐冠の兜を朝日に輝かしながら、敵勢を尻目に掛けて大きく輪乗をしたかと思ふと、駒の頭を立直して、一氣に敵陣に乘入つた。吹分けられるやうに敵陣の一角が亂れた所を、猩々緋の武者は槍をつけたかと思ふと、早くも三四人の端武者を突伏せて、悠々と味方の陣へ引返した。

會心

殺到

浮足立つ

その日に限つて、黒革緘の鎧を著、南蠻鐵の兜を冠つてゐた中村新兵衛は、會心の微笑を含みながら、猩々緋の侍の華々しい武者振を眺めてゐた。そして、自分の形だけでさへこれ程の力を持つてゐるといふことに、かなり大きい誇を感じてゐた。彼は二番槍は自分が合さうと思つたので、駒を乗出すと一文字に敵陣に殺到した。  
猩々緋の武者の前には戦はずして浮足立つた敵陣が、中村新兵衛の前にはびくともしなかつた。その上、彼等は猩々緋の槍中村に突亂された恨を、この黒革緘の武者の上に復讐しようとして猛り立つた。  
新兵衛は平生とは勝手が違つてゐることに氣がつい



怖氣  
狼狽

裏をかく

た。平生は、虎に向つてゐる羊のやうな怖氣が敵にあつた。彼等が狼狽して血迷<sup>のぼせ</sup>うてゐる所を突伏せるのに、何の雜作もなかつた。今日は、彼等は對等の戰をする時のやうに勇み立つてゐた。どの雜兵も、どの雜兵も、十二分の力を新兵衛に對して發揮した。二三人突伏せることさへ容易ではなかつた。敵の槍の鋒先がともすれば身をかすつた。新兵衛は必死の力を振つた。平素の二倍の力をさへ振つた。併し、彼はともすれば打負けさうになつた。氣輕に兜や猩々緋を貸したことを後悔するやうな感じが、頭の中を掠めた時であつた。敵の突出した槍が鎧の裏をかいて、彼の脾腹を貫いてゐた。

（極樂）

島崎藤村

名は春樹、長野縣の人、詩人、小説家、明治五年生。

隅田川

東京市の東部を流るゝ川、その上流を荒川といふ。

### 一五 文章の道

島崎藤村

十七八歳の頃、私は隅田川でよく泳いだことがある。全く水には經驗のなかつた私も、漸く岸を離れることが出来るやうになり、次第に中流までも進み得るやうになつて、一夏も水泳場に通ふ中には、向うの河岸まで泳ぎ越すことが出来た。更に又一夏も泳いで見たら、焦つて水ばかり飲んでゐた頃には、よくも分らなかつた瀬の早い遅いも分つて來たし、淡水と潮水の雜り合つたあの川の中の冷たい處と、温い處とも分つて來たし、水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の様子を、泳ぎながらに見



ることも出来るやうになつた。板子なしには溺れる外はなかつた私も、二夏の末には、優に隅田川を横切つて往復することが出来た。私は普通の泳ぎ手が行ける處までは、自分も到達し得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことは、なかく容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身の出来る人を見たり、拔手の上手な人を見れば、全く感歎して了つた。

文章の道にも、誰にでも到達し得られるやうな境地があるに相違ない。そして、根氣さへあれば、そこまで行くことは決して困難でないに相違ない。

小諸  
長野縣北佐久郡小諸町。

射手

一手揃

信州の小諸こもろにゐた時分、私は弓の稽古をしたことがある。誰でも、最初の中は、的に向つて矢を中てることばかりを心掛ける。「唯中りさへすればいゝ。」かう思ふ時代には、幸ひに一本の矢が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひも寄らぬ場所へ飛んで行く。射手の心に頼む所もなく、矢の曲直を辨別する力もなく、さうして幸ひに中つた矢は、徒らに煩い高慢な熟練を思はせるばかりだ。

小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得のある老人が私達の矢場に來た。その老人は、先づ「姿勢」を正すことを私達に教へてくれた。それからの私達の矢は、たとひ的を貫くことが出来ないやうな場合でも、一手揃で同じ場所



焦心

に行くやうになつた。

是は文章の道にも當<sup>あ</sup>筋<sup>ま</sup>めて見ることが出来る。唯好い文章ばかり作らうと思つて焦心することは、決して目的を達する道でない。眞に好い文章を作らうと思へば、どうしても先づ「自己」から正してかゝらねばならない。

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鋤を執つたことがある。讀書の傍、よく鋤を擔いで行つて、土を耕して見た。私は先づ荒れた畠の地面を掘起すことから始めた。土を碎いた。小石を擇りわけた。地均しをした。汗を流してそれをやつた。葱の苗や馬鈴薯のやうな植<sup>う</sup>ゑ易い

さく

手

痛切

ものから作つて見た。その畠には、大根・白菜・茄子・豌豆・胡瓜などの類をも植ゑて見た。草を取りに行き、さくを掛けに行つた。馬鈴薯の花が盛の頃、試みに土の中を探つて見ると、はや丸い薯が幾つも幾つもその根元の方から出て來た。豌豆の蔓は長く延びて、人の丈よりも高く手に絡みついた。畠の中には、嫩<sup>わか</sup>い莢<sup>か</sup>を摘む鋏の音が聞えた。粗末ながらも、自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうになつた。それから私は周圍にある耕地を見て廻り、本當の百姓の手でよく整理されてゐる畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが、痛切に自分の身に感じられるやうになつた。私は或耕作を通し



て、非常に嚴肅な念に打たれたことを、今でもよく思ひ出すことが出来る。

文章の手本とすべきものが何程我々の周圍にあつても、それを悟らなければ仕方がない。それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければならぬ。「試みる」といふことは、「悟る」といふことの第一歩だ。

浅草の新片町に住んでゐた頃、家が浅草橋や兩國橋に近いので、私はあの隅田川の界限を漕廻つたことがある。最初の中は無暗と手足を動かさし、あの長さ一丈ばかりもある艀を前へ押し、手許へ引きして、骨折つて見た。それ

界限

簡素の美

表白

結晶の力

でも舟は思ふやうに進まなかつた。が、次第次第に手足を動かすことが少なくて、身體全體の力でゆつくりと艀を押すことが出来るやうになつた。「向うから大きな傳馬がやつて來たぞ。あれに一ツ衝突しないやうに。」かう思つて漕いで行く楽しみなども、それから起つて來た。その後、船頭のするところを見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには、「力の省略」があり、「簡素の美」があつた。文章の道に於ても、無暗と筆を弄することが、決して自己の眞の「表白」とはならない。眞に好い文章には、眞に好い「結晶の力」がある。

—(藤村全集)—



一六 歌ごころ

北原白秋

北原白秋  
名は隆吉、福岡縣  
の人、詩人、歌人、  
明治十八年生。

心柄といふものは、ほんのちよつとした言葉の端にも  
あらはれるものである。

葛飾の眞間  
千葉縣市川市の  
字、葛飾とはこの  
あたり一帯の稱。  
銚子  
千葉縣銚子市。

私が一夏住んでゐた葛飾かっしかの眞間まゐまの寺の坊さんに、或時  
銚子ちうし行の川蒸汽の話が出たので、此處から銚子までは餘  
程でせうね。」と訊くと、「いや、たいした賃錢でもありません。」  
と坊さんが答へた。私は里數を訊いたのに、坊さんは大  
變なことを答へたものである。坊さんはこの一言で、飛  
んでもない俗僧であることを私に知らしてしまつた。  
だから、その後、その坊さんが、田圃の蛙が鳴いたら、石油

をぶつかけなさい。」といつてくれた親切な言葉にも、私は  
さほど驚きはしなかつたのである。

古池や……  
松尾芭蕉の句。

古池ふるいけや蛙飛びこむ水の音

大變な違ひではないか。

また或時、或三人の男が膝を交へて坐つてゐた。その  
時、バナ、をお盆に山ほど女中が持つて來た。そのバナ  
ナはまだ青かつた。これを見た瞬間に、一人が「あゝ、いゝ  
な。」といつた。一人は「だめぢやないか、青いな。」といつた。  
一人は「全く小笠原のは値ばかり高くてね。」といつた。三  
人とも親しい友達だつたが、一人は畫家で、一人は商人、あ  
との一人はコーヒー店の主人だつた。畫家は、その時、色



の輝きを觀た。商人は味を感じた。そしてコーヒー店の主人公は値を考へて、一緒にはつと思つたのである。この中の誰の心が一番尊く磨かれてゐたか。

畫家は無論、輝いた青い色を觀たばかりではあるまい。その輝きの底に潛むバナ、の生きた命そのものをも觀とほしたに違ひない。

また、かういふことがあつた。

或歌自慢の人が眞間に訪ねて來て、私に歌を見てくれといつた。私はまあ散歩でもしてみようと、一緒に外に連出したものだ。その人は途々も何かしらしやべくつてゐたやうだが、私は夕方の空や、田圃の景色にばかり眺

め入つてゐたのである。

まだ赤い夕焼が西の空には残つてゐた。眞間の小川の土手の上を歩いてゐると、ふとその人がしやがんで小石を拾つた。何をするのかと見ると、何といふ可憐な繪模様だつたらう。私は思はず立ちどまつてしまつた。

たわむ

そこには鮮かな裏白の葉の河楊かはやなぎが水の面おもてに揺れてゐた。そのたわんで揺動いてゐる一つの枝には、まだ小さな燕の子が一羽とまつてゐた。また一羽來た。枝はいよいよ揺れる。枝の先は水について、波を立ててゐる。燕の子達は、紅い頬を揃へて、さもく恐ろしさうに啼立てる。また一羽とまると、枝はいよいよ揺れだした。と



必死  
いたいけな

もすると、すべり落ちさうになるので、今は必死となつて  
縫りついてゐる。その艶々した黒い裂羽、いたいけな啼  
きごゑ。それだけでも、かはいゝのに、また一羽羽ばたい  
てつい近くまではやつて来るが、枝の上の燕の子はそれ  
を見て、あわてて、いけない、いけないと啼く。これ以上と  
まつては、枝がすつかり水につかつてしまふのである。  
空の一羽はとまるにはとまれられず、寂しさうに啼きなが  
ら、翔つては近寄り、近寄つてはまた翔り出す。  
その燕に向つて小石を投げたのである。  
私ははつとしたが、それでも黙つてゐた。寂しい氣持  
でほゝゑみながら、私はまた何氣なく歩みを續けた。さ

うして或所までその人を送つて行つてから、さやうなら、  
またおいでなさい。」と別れの握手をした。それで歌はた  
うとう見ずじまひである。見なくとも、もうどれだけの  
歌かわかつてしまつたのである。無論どれだけの歌を  
作る人もわかつてゐる。

なぜか。

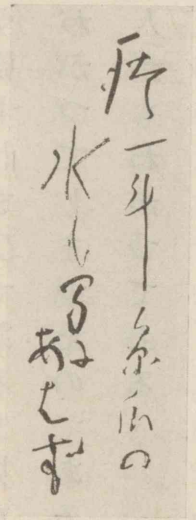
それは、その一事でその人の人柄がまだ出来てゐない  
といふことが、はつきりと私にわかつてしまつたからで  
ある。「心」が出来なければ歌は出来ない。

（洗心雑話）



一七 宿り木

四つに組んで最頂の多き相撲かな  
子規  
落葉して宿り木青き梢かな



蹟筆規子

押立ててはや散る笹の色紙かな  
鳴雪  
元日や一系の天子不二の山

子規

本名は正岡常規、松山市の人、明治三十五年歿、年三十六。

痰一斗糸瓜の水も間にあはず

鳴雪

本名は内藤素行、松山市の人、大正十五年歿、年八十。

虚子

本名は高濱清、松山市の人、明治七年生。

漱石

本名は夏目金之助、東京市の人、大正五年歿、年五十。

瓊音

本名は沼波武夫、名古屋市の人、昭和三年歿、年五十。

紫影

本名は藤井乙男、兵庫縣の人、文學博士、明治元年生。

四方太

姓は坂本、鳥取縣の人、大正六年歿、年四十五。

松守

本名は伊藤半次郎、長野縣の人、安政六年(一五五)生。

月斗

本名は青木新護、大阪市の人、明治十二年生。

秋櫻子

本名は水原豊、東京市の人、醫學博士、明治二十五年生。

蛇笏

本名は飯田武治、山梨縣の人、明治十八年生。

桐一葉日あたりながら落ちにけり  
虚子  
枯薄ほつゝ出でぬ雪の原  
漱石  
草山に馬放ちけり秋の空  
瓊音  
西瓜太郎躍り出でよと割つてけり  
紫影  
落葉ふる音一しきり大伽藍  
四方太  
竹に打ち葉蘭にはじく霰かな  
松守  
木枯や浪の上なる佐渡が島  
月斗  
落日が一時赤し稻を刈る  
秋櫻子  
颯雲天にひろごり萩咲けり  
蛇笏  
とくゆるく露流れゐる木膚かな



落合直文

宮城縣の人、歌人、國文學者、明治三十六年歿、年四十三。

一八 幼時の正月

落合直文

牛若丸  
源義經の幼名。  
辨慶  
義經の臣。  
曾我兄弟  
曾我十郎祐成・曾我五郎時致、父河津祐泰の仇工藤経経を討つ。

神功皇后  
仲哀天皇の皇后。  
武内宿禰  
景行天皇・成務天皇・仲哀天皇・應神天皇・仁徳天皇の五朝に歷仕す。

年もはや暮れんとす。病院の寢臺に打伏して、つくづくと過去の正月を追想するに大方皆忘れにたれど、幼時の事どものみはよく記憶せり。幼時は思想單純なり。故に一たび頭腦に刻みたる事は、生涯忘るゝこと能はざるにやあらん。

或年の正月、父君より賜はれる紙鳶は、牛若丸と辨慶との繪なりしよ。或正月、母君の得させ給へる雙六は、振出しが曾我兄弟にて、上りが神功皇后と武内宿禰との繪なりしよ。此の紙鳶此の雙六は最も我が氣に入りの物と

をかしや

南山壽

上和下睦

躑躅岡

仙臺市の東隅にあり、天満宮は寛文七年(三三)に伊達綱宗公がこゝに移せるもの。



落合直文

見えて、牛若丸・辨慶の面影は更なり、雙六の繪も、大方記憶せり。其の紙鳶を揚げたる日は風強かりしが、隣の栗の木に引掛けし事、又、其の雙六にて取り得たる菓子は何なる菓子なりしか、數は幾つなりしか、一々記憶するもをかしや。七歳の頃と覺えたり。書初に「南山壽」といふ三字を書きて、父君より「上和下睦」といふうるはしき

墨を賜はりたる事あり。其の日、父君の御許しを得て、兄弟とともに躑躅岡なる天満宮に參詣せしが、其の折の我が刀脇差よ、ふちがしらは、唐獅子と牡丹とを彫刻せるも



鏤  
小姓  
繪馬堂

の、鏤はつやめきたる黒き地金に七曜の星を鏤めたるもの、下緒は紫色にて平打なりし事まで記憶せり。其の折、母君の著せ給へる著物の紋も記憶すれば、袴の色も記憶せり。供せるは小姓の鐵之助、忠兵衛の二人と、仲間の彌助となり。石のきさはしを上る折は、彌助に負はれ、繪馬堂をめぐる折は、忠兵衛に手を引かれたる事も記憶せり。家に歸りて、著物は著かへたれど、刀脇差は放たず、其の一日差し居りし事も記憶せり。  
其の頃の我等の心の、如何に無邪氣なりしよ。思ひ出づるごとに、今一たびさる幼時にたちかへらまほしう覺ゆるや。我が幼時は、殊に愉快なりしなり。思ひ出づる

零落

伊達家の門閥  
落合直文の父鮎貝  
盛房は伊達家の家  
老なりき。

家格

慘狀

事は、悉く愉快なりし事にて、苦痛といふ程の苦痛は更に記憶せざるなり。  
其の當時、我が家の勢は如何にといふに、極めて零落せる時なり。伊達家の門閥にて、きらびやかなる生活をなし居りたるものが、維新の劇變にあひ、家祿は召上げられ、家格は墜され、何も頼るところなきに、家は大なり、家來は多し、此の程の我が家の慘狀、父君、母君の苦心、後にて聞き知れり。さる家運衰退の折なるにかゝはらず、苦痛といふ程の苦痛は覺えず、かく愉快なる事のみ記憶し居るは、父君、母君の温き情ならずして、そも何ぞや。  
殊に、我等の最もよく記憶して忘るゝこと能はざるは、



末つ方

おろそか

やめね

此の程の或正月、父君の病床におはせし時の事なり。前の年の十一月頃より病みつき給ひて、十二月の末つ方には、よほど重くならせ給ひたれば、母君は「松節もおろそかにせよ、屠蘇もやめね、餅も少なくてつけ」などのたまへり。それを聞き居たる我等の失望は如何に、兄弟互に顔見合はせて、泣きぬべく覺えたり。さはいへ、元日には父君の臥し給へる奥の間にて雑煮など祝ひたるが、其の折の父君の御顔よ、瘦せに瘦せ給ひて、髯なども恐ろしきまでのびさせ給へり。母君に扶けられて、強ひて起上がらせ給ひて、箸を取りは取られしが、一口も召し給はで、其の儘また枕に就かせ給へり。其の日、廊下にて兄君と獨樂を廻し

瘦せに瘦す

心なきわざ

居たるに、母君出て來給ひて、「父君の御病氣なるに心なきわざ」と、とめさせ給ひぬ。下の座敷にて、姉君と羽子つき居たるに、母君また出て來給ひて、とめさせ給ひぬ。夜に入りて、雙六歌留多などの事、頻りに思ひ出でたれど、母君の許させ給はねば取出ださず。二日の朝、父君は我等をよび給へり。何事ぞと行き見れば、「我が病氣は早よくなれり。今日よりは獨樂も廻せ、羽子もつけ、雙六もせよ、歌留多も取れ」とて、蜜柑數多を取出でさせ給へり。其の折の我等の愉快は如何に。過去の正月に、此の時程の愉快はなかりしのみならず、未來の正月にも亦、此の時程の愉快はなからん。

—(落合直文集)—



瀧澤馬琴

名は解、江戸の人、小説家、嘉永元年(二五〇)歿、年八十二。

寛政二年

光格天皇の御代の年號。(三四五〇)

君平

蒲生君平、名は秀實、また夷吾、宇都宮の人、勤王家、文化十年(四七三)歿、年四十六。

舊典

文章

昇平

こそ安からぬ

### 一九 蘆庵と君平

瀧澤馬琴



瀧澤馬琴

寛政二年の冬なりき。君平つらく思へらく、昔時、建武・延元の内亂より應仁の兵火に至りて、天朝の舊典みな悉く亡失し、文章は永く地を拂ひて、世は戰國となりしこと二百餘年、その惡俗の餘毒流れて、昇平の今の世まで、洗ひ清めんとするもの少なきこそ安からぬ。いで、我が古學を興して、國體を張り、天下の爲に死力を盡して、國恩に報ずべし」と。乃ち指を噬み、血を染めて、「孝子之情

革命  
ぞ……ける

林家

徳川幕府の儒官を世襲せし家門。

林四維山

林道齋

遊學

時情

迂闊

故實

六經

聖人の手に成りし易書、詩、春秋、禮、樂の六書をいふ。

有終身喪、忠臣之心無革命、世と大書し、愈志願の臍をぞ固めける。

その後、君平江戸に往來しける時、林家の門人となりて、



蒲生君平

帶刀して儒學を唱へ、世に名高き儒者、國學者、文人、墨客と交りて、遊學すること久しかりき。されどその持論時情に愜はず、或はこれを迂闊とし、或はこれを狂妄として、嘲り嗤はぬ者は稀なり。君平これを物の數ともせで、愈守りて、自ら貶さず。嘗てその友に語りて曰く、「昔の儒官は明らかに天朝の故實に通達し、六經を以てこれが資



名正し

夏夷順逆の理

名を

としたりければ、名正しく、事行はれざることに無かりき。然るに今の俗儒は天朝の故實を知らず。なほ夏夷順逆の理に暗くして、名を亂り、言を紊るもの多し。その位にあるものはその道を行ひ、その位にあらざるものはその言を行ふこと、古今一致なり。我が憤を發し、志を立て、古學を興して、逸史を修め、力を經世に盡して、國恩に報じ奉らんと欲するは他なし。かの曲學阿世、名教の罪人たることを知らざるものとともに隣をなさじと思ふのみ」とぞいきまきける。

この頃よりして、君平、古昔の山陵多く荒廢して、その迹定かならざるものありと聞くこと久しかりしかば、先づ

逸史

曲學阿世

隣をなさじ

いきまく

里老

山陵志より創めんとて、京に赴き、それより南海を越え、淡路に渡りき。素より路費の乏しきを憂とせず、險を履み、風雪を冒して、遂に六十六國その半ばを經歷し、或時は里老に問ひ、或時は舊圖を考へて、諸陵存亡の趣を目撃したりけり。而してその著述の爲に辛苦を辭せず、月日は旅寢に移れども、その志移らずして、愈、精力を盡しけり。初め君平山陵探求の爲に京に赴きし時、彼の地に絶えて知る人なかりければ、頼らん方もなくて困り果てぬ。時に小澤蘆庵は古學を好み、萬葉風の詠歌に名高く、世に拗ねたる隱逸なりと聞きたれば、その力を借らんとて、やがて蘆庵が宿所をおとなふに、それが僕出で迎へて、いづ

小澤蘆庵

名は玄中、尾張國(愛知縣)の人、歌人、享和三年(三)冥三歿、年七十九。

隱逸



妙手

こより。」と問ふ。佯りて、某は下野なる宇都宮の蒲生伊三郎といふ者なり。琴を好み候へども、田舎にはよき師なし。主人の翁は琴の妙手にておはする由聞き傳へて、遙



小澤庵

遙と尋ね來つるにて候。」といふ。僕は奥に赴きて、これを告げたるに、蘆庵は聲を高くして、「あな、無益にも訪はるゝものかな。汝出でて、しか答へよ。」主人は久しう客を辭し、交を絶ちたれば、都のうちだにも親しうせるものは稀なり。琴は若かりし時かき鳴らしたりけるを、遠近の人に知られて、かれ

つばらに

わどの

ものから

に聽かせよ、これに教へよといはるゝがうるさければ、近頃うち摧きて、薪に代へたり。かゝれば、所望に従ふべくもあらず。他に求め給へ。」と言へ。」といふ。君平は僕が報ずるをも待たず、「翁の御答は此處にも、つばらに洩れ聞えたり。某なほ一言あり。願はくは、枉げて聞き給へ。我は實は儒者なり。しかゝの志願ありて、都に上りつれども、相識れるもの絶えてなし。翁の古學を好み給ふと、その氣質の俗ならぬとは、かねて傳へ聞きしものから、言寄る由のなきまゝに、琴を學ばんとて來つ。」とは言へるなり。こは長者を欺くに似たれども、その虚言は已むを得ざるより出でたるなり。今一度、わどのを勞せん。この



客人

足下

辭む

由取次ぎ給へ。」といふ。蘆庵もこれを洩れ聞きて、「さりとは思ひがけざりき。そは珍らしき客人なり。對面せずば、悔しきこともあらん。こなたへと申せ。」とて、やがて面を會せけり。君平深く歡びて、事の趣つばらに語り出づるに、蘆庵ひたすら感歎して、「足下は得難き學士なり。さる志ならんには、我が庵（ホリ）に杖を留めて、こゝらあたりの陵を靜かに探求し給へ。」とて、また他事（他事）もなくもてなしけり。これより君平は日毎に陵を尋ねめぐるに、ともすれば日暮れて歸るを、主人はいつもみづから風呂を焚きて、入浴せさするを例とせり。君平その心遣ひを心苦しとて辭みたれど、「これらのことは只管に客を愛するのみなら

更闌く

させる

非を飾る

ず。足下の如き國の爲に力を盡す人の疲勞を、聊かなりとも打慰めん（ウツレドム）の心のみ。必ず辭み給ふな。」とて聞きいれず。かゝりしほどに、君平は或夜、更闌（ミタタケ）けて、子二つの頃歸れるに、蘆庵はいまだいねず。例の如く入浴せさせ、飯をすすめ、さていふやう、「我、足下を宿せる日より、蔬菜の外に物もなく、させるもてなしをばせざれども、老僕を憇（レウ）はせんとして、手づから風呂をさへ焚くを、思ひ掛（カ）み給はずや。陵を尋ねめぐればとて、今までは用なからんに、道草食うてか、老人に物を思はせ給ふこと、心得がたし。」と呺（ウツ）く。君平聞きて容を改め、「翁のうらみ理なり。我が非を飾（カ）るにあ



懺悔

等持院  
京都市上京區衣笠  
にあり、尊氏の廟  
所。  
梟臣

逆に  
守る  
干戈

らねども、今宵かく更コシタ闌けたるは、聊か故あり、懺ザンケ悔の爲、笑  
に供へん。今日は某の天皇の陵を尋ねけるに、日暮る、  
まで尋ねもあはで、思はずも等持院なる尊氏の墓を見た  
り。こゝに至りて、年頃のうらみ心頭におこりて、堪へら  
れず。墓トカに對ひて罵りけるは、『梟臣尊氏、靈あらば、今言ふ  
事を確に聞け。汝が一旦治りたる建武中興の世を亂し  
て、逆に取り、逆に守り、毒を後世に流してより二百十數年、  
干戈をさまらず、國の舊典も爲に焼け失せ、王室もこれに  
よりに衰へ、歴代帝王の山陵すらも迹なくなりて、我等に  
さへ飽くまで物を思はするは、皆これ汝が罪なり。天罰  
思ひ知るべし。』とて、杖もて、石塔の邊を思ふがまゝにうち

敲カキきぬ。

かくて寺門を出づるほどに、物欲しうなりければ、道の  
邊の酒屋に立寄り、怒に任せて飲むほどに、六七合を盡し  
たり。さて酒屋をば出でたれど、酔ひて足も定らず。こ  
のまゝにて歸らば、必ず翁に叱られん、半ば醒して行かん  
と、株に尻を掛けたるが、うまいやしけん、驚き覺むれば、早  
更闌けたり。と語るに、蘆庵は呵々と打笑ひ、さても世には  
似たる馬鹿者もあるものかな。我も去にし年、或日靈山レイサン  
の邊に逍遙して、長嘯子の墓所を過ぎける時、行きもえや  
らず、睨ニラまへて、『長嘯子、不滅の罪あり。わぬしみづからこ  
れを知るか。わぬしは豊太閤の外族として、位高く、采地

うまい

靈山

鷲尾に同じ、京都  
東山の一峯。

長嘯子

本名は木下勝俊、  
秀吉の室北政所の  
兄の子、慶安三年  
（三三〇）歿年八十一。  
太閤  
采地



伏見城  
京都市伏見區にあ  
り、豊臣秀吉の居  
城。

鬼胎

鳥居元忠

徳川家康の臣、慶  
長五年(三三六)歿、  
年六十二。

えせ歌

一盲衆盲を引く

冥罰

鬼園小説

二十卷、瀧澤馬琴、  
屋代弘賢、山崎美  
成等十四人の隨筆  
集。

も廣かるに、心さま武士に似ず、伏見の籠城に、敵の旗色に  
鬼胎を懷きて、鳥居元忠等を棄殺しにし、かつ事平ぎて後  
罪を蒙り、纒かに命を助けられたるを幸にして、恥を知ら  
ず。心にもあらぬ世捨人顔して、えせ歌多く詠じたる、一  
盲衆盲を引きしより、歌の調のわるくなりて、今に至るま  
で直らぬは、これ不滅の罪にあらずや。冥罰かくの如く  
ならん。』と罵りながら、杖もて墓を打たんとしたることあ  
りけり。こはよく似たるにあらずや。』と語りもあへず、聞  
きも終へず、齊しく腹を抱へけりとぞ。

一(鬼園小説)一

二〇 岡井仁右衛門へ

蒲生君平

先夜は參上御意を得、殊にかき餅の御饗應忝く存  
じ奉り候。その節、をり悪しく他人至り候うて、用事  
の談話申し盡さず候。さて拙者儀かね、申す通  
り、歴代帝王の山陵久しく荒廢して、御祭をとめ、そ  
の所在も明らかに知り得ず候間、尋ねしたゝめ候へ  
ども、なほ遂げず候。この度林大學頭殿へ申し入れ、  
よつてその使として本月五六日までに出府、それよ  
り遂に上京仕るべく候。それ一天の君、世々に御祀  
ありて尊崇すべき第一儀に候へども、亂世以來禮法

林大學頭  
名は衡、述齋と號  
す、徳川幕府の儒  
官、天保十二年  
(五〇)歿、年七十  
四。  
出府



有識

伊豆殿

松平伊豆守信明、  
三河國(静岡縣)吉  
田藩主、文化十四  
年(一七七五)年五十  
五。

渭城朝雨纏輕塵、  
客舍青青柳色新、  
歡君盡更一杯酒、  
西出陽關無故人。  
人。(王维、送元  
二使安西) 下野  
一布衣 蒲生秀實  
延喜

醍醐天皇の御代の  
年號。

天曆  
村上天皇の御代の  
年號。

壞れ、今、治平二百年に及べども、上にさまでの有識こ  
れ無きにつき、唯、等閑に相成り候ことに候。幸に、當  
今御老中伊豆殿を始め大學殿、いづれも皆一代の賢

渭城朝雨纏輕塵、客舍青青、  
柳色新、歡君盡更一杯酒、  
西出陽關無故人。

蒲生君平筆

才に御座なさ  
れ候。御政教  
を勤め給ふこ  
と、延喜天曆の  
昔にも劣るま

じく候。この時にして、その一二の闕を補うて忠功  
を達する事、拙者多年の願に候。不幸にして去年父  
を喪ひ、この度一回忌も已に過ぎ候へば、右申し上ぐ

合力

佐野

君平と親交ありし  
下野國(栃木縣)  
安蘇郡佐野の人、  
尙志道人、文化十  
二年(一七七五)年  
六十四。

鹿沼

君平の恩師、下野  
國鹿沼の驛の儒者  
鈴木石橋、文化十  
二年(一七七五)年  
六十二。

浪々

る通りに御座候。これにつき、江戸にて親しき二三  
の御旗本にも合力、四五兩は得べく候。また佐野鹿  
沼など師友の間にて、衣服腰の物の支度を致され、數  
年浪々の拙者やうく、眞の武士に罷りなり候。し  
かれども、關東より千里西遊、六七十日の物いりに心  
遣ひ申し候間、前に申す儀に免じ、金子拾兩拜借仕り  
たく候。この儀、せんだつても申し入れ候へども、金  
員數なほ定めず候。たゞ御承知下され候間、更にか  
くの如く申し上げ候。昔、商人にも義を好み申す者  
は、奥州の金賣吉次が九郎義經における、山川屋儀兵  
衛が大石内藏之助における、この外に金を輕んじ、忠



義舉

義の名を立つる者多く御座候。この度の儀、拙者も雪霜の寒を冒し旅行する事、貴公にも御推察下され、御承知にて金拾兩御貸し下され候はば、これまた天下第一の義舉に御座候。忠感定めて神明に達し候はん。かつ貴公は拙者における母方の姻親家にて、千金を蓄へて、元より一郷の良と聞きたれば、拙者も外に求めずして、貴公に直ちに御頼み申す事に候。

十一月二十八日

蒲生伊三郎拜

岡井仁右衛門様

十一月  
寛政十一年(三四五九)  
岡井仁右衛門  
宇都宮の豪商、文  
化十四年(四七七)歿、  
年六十。

二二 鷹が渡る

野村傳四

野村傳四  
鹿兒島縣の人、教  
育家、明治十三年  
生。

愁人

「鷹が渡る」といふ鋭い聲が、秋の空氣を突抜けて、村の一隅からおこる。同じ聲が他の一隅にもおこる。稲の穂波の黄ばみ渡つた田の中からもおこる。椿や竹の森に隠れた家からもおこる。時は愁人の膚そゞろに寒き十月の頃、渡り鷹の一群が南を指して秋の空を渡り行く偉觀は、余が故郷なる大隅の南端を除いては、日本國中何れの地にも見ることは出来まい。余は嘗て黒潮の流を下つたことがある。流の早い海峡を通過したこともある。深碧の潮の流は直徑二三百



米に互る一大圈を劃して、盛に渦を巻き、眞白い泡を表面に漲らせて、汽船をも捲込み、押流すやうな勢で流れて行く。雪寒き湖北の天地から、椰子の葉青く、風薫る南洋の冬に渡つて行く一種の鷹は、まさにこの潮流と同じく、大空を廻轉しつゝ、進んで行く。而して又同じく偉觀である。

音を發すると間も無く空に吸込まれる花火の煙ほどの雲もない秋の空は、日本晴に晴れて、天上には祕密の隠れ家もない時、南を指して雙翼をのばしたこの避寒客の数は、十萬か五十萬か、はた百萬か知らぬ。はじめ、鴨くらみに見えた一群の鳥は、高く舞ひあがるために、障碍物も

ない大空に、直徑數百米もある一大圈を劃しはじめ。

一隊が一廻轉したかせぬかといふ頃になると、鴨ほどに見えた形が雀くらみに小さくなる。すると、一隊はひとまづ南方に流れ出す。夢のやうにすうと飛んでは、翼を忙がしく使ふさまは、隼に似てゐる。しばらくすると、また廻轉し始める。雀ほどの影はさらに遠ざかつて、糠蟲ほどになる。さらにまた流れ出す。かくして廻轉を繰返し行く間に、一箇一箇の影は青絹の上に落した墨痕のやうに見える。そして



鷹



蕭々

神韻縹緲

一隊が南に去れば、後の一隊がその跡を襲ふ。後の一隊が遠ざかれば、またその後の一隊がこれに續く。しかしこの大集團に一羽の外れるものもなく、聲を立てるものもない。あたかも南より北に奔る天の川が、あらゆる星の影を掠めて、晝の間を逆に流れるかのやうに見える。百萬の師が隊伍蕭々として萬里遠征の途に上るさまをも想像させる。神韻縹緲たる詩集の一卷を繙くやうな心持にもなる。

「鷹が渡る」といふ聲が、この村の何處かに響き渡ると、全村の注意を惹く。小學校の兒童は一同廣い校庭に飛出して空を仰ぎ、手を拍ち、地だんだ踏んで、「鷹よ、鷹よ」と小さ

い喉も張裂けるばかりに叫びつゝ、一行の首途を祝してやる。老人は靱を一杯にほした庭に滑り下りて、見えぬ眼を擦りつゝ、青空を見上げて、過去幾十年の秋の記憶を繰返す。黄ばみ渡つた畑に立つ夫婦は、しばし鋤の手を休め、頭の手拭を取去つて、顔の汗を拭きつゝ、一度空を仰ぎ、互に相顧みて、更に笑顔に一行を見送る。鷹は旅を急いで、どん／＼南に去る。見送る人の心はさまざまであらう。裏の畑に穂を啄む雞は、け／＼な顔を上げ、長く伸ばした頸を傾けて空中の壯觀を見る。今まで竹藪に火の附いたやうに騒いでゐた群雀は、ちゆ／＼といふ一羽の合



蠢々

殿軍

佐多岬  
鹿兒島縣肝屬郡佐  
多村(九州の南端)  
にある岬。

圖にぴたりと鳴りを静め、ひれ伏して、笹蔭から天上の行列を送る。茅葺の屋根に秋の日を浴びて睦まじく遊んでゐた家鳩の夫婦は、あわたゞしく我が巢に引籠つて、空を仰ぎ見ることすら敢へてしない。渡り鷹の奇隊は、蠢たる地上の影を顧みもせず、悠々として南に去る。かくて前後五六料に互る大軍は、僅少の殿軍を除けば時餘にして全く通過し、それより十四五料を距てる地に蜿蜒として南方の空を壓する千五百米以上の山脈を眼下に見、進んでは佐多岬の燈臺を兒戲と觀て、洋々たる大洋を今日も明日もと南に越えて行くのであらう。目的とする處は臺灣か、フィリッピンか、但しは南洋の島々か。

パノラマ

「鷹が渡る。」余は弱冠にして家を出て、故郷の秋に背くことこゝに十幾年である。しかし身は何處の境に在つても、この一語を想ひ起せば、直ちに故郷の遠山・近岳・山村・水郭を背景として、渡り鷹の大群が一大パノラマの如く眼前に浮ぶ。眼を閉ぢても去らぬ。それと共に幼時の秋の記憶は余の腦裏に黒潮のごとく渦巻き、渡り鷹のごとく廻轉する。



二二二 皇軍の面目

冬來たりなば、春遠からじ。

滿目蕭條

滿洲の冬は今こゝに來てゐる。滿目蕭條、目に一木一

高粱

草の青さも映らない。立枯れた高粱に、風さへも通はな

い。遙かの地平線に、今赤い夕陽が沈みかけてゐる。

鳥さへも飛ばない。

春は果してこの後に來るのだらうか。

來る、必ず來る！ 滿洲の春を拓くもの、冬を征服する

もの。見よ！ 高粱の蔭を。人の住むとも思はれない小

舎の前に、枯草を敷いて車座になつてゐる十人餘りの一

車座

前衛

團を。

つはもの、皇軍のつはもの。これこそ滿洲の春を持つ

て來る開拓者の前衛だ。

此處は御國を何百里

離れて遠き滿洲の

赤い夕陽に照らされて

軍歌がその一團の中から聞えて來る。見れば、頬髯の

ぼう／＼と生えた一人が、大きな口を一ぱいにあけて歌

つてゐるのだ。



齊齊哈爾  
龍江省の省公署所  
在地。  
一番乗

「おい中島歌はよせ。子供の時が憶ひ出されてならん。」  
「馬鹿な事をいふな。明日はいよく總攻撃なんだ。  
齊齊哈爾一番乗をやるんだ。この世の思ひ出にと言ふ  
ところだな、思ひきり歌ふんだ。」

「それより、もう準備は出来たのか。背囊の締革の修理  
は終つたのか。」

「やつたよ。靴もやつたし、何十里でも何百里でも大丈  
夫だ。はゝは。」

草むす屍

歩兵第七十八聯  
隊  
京城府龍山に在り

「明日はどうせ草むす屍だ。みんなの顔も見納だな。」  
「さうだ。歩兵第七十八聯隊第七中隊第一分隊一同、こ  
こに最後の宴を張るといふわけか。はゝは。」

「水筒の水は灘の生一本、乾パンは鮪の刺身と……いや  
に固い刺身だな。はゝは。」

「いや思ひ出した。いや、御馳走があるぞ。」

中島正木一等兵が背囊をあけて取出したのは、細長い  
紙包。一枚解いて、又一枚解いて、その次一枚、その又次に  
丁寧包んだ一本の煙草。

恩賜

「おいこれを見ろ。恩賜の煙草だ。一本大切にしまつ  
て置いたのだ。みんなで分けて吸はう。戦友のお名残  
だ。」

「これは有難い。いや、思ひつきだ。どれ、菊の御紋  
が光つてゐるぞ。大君の邊にこそ死なめだ。」



「おい、俺が持つてたんだから、先づ第一に俺が吸ふ。福岡縣三池郡駛馬村陸軍歩兵一等兵中島正木、只今恩賜の



友 戦

煙草を戴きます。我々分隊战友の今生の記念として、は、は、何だか咽せる、いやに煙いや、煙に涙が……。」

「早くよこせ。二服も吸つちや、あとがないぢやないか。早くよこせよ。」  
「待て待て、もう一服だ。」  
「いかん、いかん、今度は俺だ。あゝ有難いな、おい、みんな、天皇陛下萬歳だ。」  
期せずして一同の口から、天皇陛下萬歳の聲が起つた。髯もぢやの顔をくしゃくしゃにして、煙草の煙に咽せたと稱して流す涙！中には聲も出ないで、手ばかり上げてぼろ／＼流してゐる者もある。  
「もうこれで思ひ残す事はないぞ。一本の煙草を、しかも恩賜の煙草を、分隊一同分けて吸つたのだ。煙草も

「早くよこせ。二服も吸つちや、あとがないぢやないか。早くよこせよ。」  
「待て待て、もう一服だ。」  
「いかん、いかん、今度は俺だ。あゝ有難いな、おい、みんな、天皇陛下萬歳だ。」  
期せずして一同の口から、天皇陛下萬歳の聲が起つた。髯もぢやの顔をくしゃくしゃにして、煙草の煙に咽せたと稱して流す涙！中には聲も出ないで、手ばかり上げてぼろ／＼流してゐる者もある。  
「もうこれで思ひ残す事はないぞ。一本の煙草を、しかも恩賜の煙草を、分隊一同分けて吸つたのだ。煙草も



二人で分けてのみ——おい戦友、死んだら骨を頼むぞ。歌の文句ぢやないが、誰でも後に残つたものが骨拾ひと決めておかうぜ。」

「解りきつた事をいふな。親子は二世、戦友は三世だ。どれ宴會をやめるとしよう。」

「誰だ、一番に下士哨に出るのは、交代まで一眠しようか。」

髯の中島一等兵の口からは、紫の一條の煙、吸へなくなつた煙草をそのまゝまだ咬へてゐるのだ。

陛下のつはものは、かうして戦友と戦友との情誼を固くして明日への戦場へ——喜んで戦場へ。

下士哨

情誼

日はとつぶり暮れた。高粱はかさ／＼風になり出した。

遠く見えるのは名も知らぬ停車場の灯だらう。蒙古犬が吠える、びようびようと。すべては冬、滿洲の冬の夜になつて行く。あの一團の兵も、すつかり闇に包まれてしまつた。

ちらと一點、赤い火が見える。まだ棄てかねてゐる恩賜の煙草にちがひない。

（皇軍の面目）



二二三 元 寇

三宅雪嶺

三宅雪嶺  
名は雄二郎、石川  
縣の人、文學博士、  
萬延元年(五三〇)生。  
北條時宗  
相模太郎と稱す、  
鎌倉幕府執權、弘  
安七年(九四四)歿、  
年三十四。

吞噬

日露戰役の酣なるに際し、朝廷は北條時宗に従一位を  
追贈せさせ給ひぬ。惟ふに、元寇に際しての彼の偉功を



北條時宗

追念せさせ給ひてなるべし。  
當時、元は國を滅すこと四十  
有餘能く其の吞噬を免れたる  
ものあらざりき。しかも我一  
たびこれと干戈を交ふるや、こ  
れを撃破して、また近海に出沒すること能はざらしめぬ。  
元、使者を遣して好を通ぜんことを求め、時宗斷乎として

輔佐  
國是  
文永五年  
龜山天皇の御代。  
(一九三)  
弘安四年  
後宇多天皇の御  
代。(一九四)

これを拒めり。かくて戰端こゝに開かれたり。これに  
就きて自ら三箇の疑問の出づるあり。其の一、拒絶は果  
して時宗の意志に出でしか。其の二、拒絶は果して道理  
を具へしか。其の三、拒絶は果して得策なりしか。事の  
跡に就きて稽ふるに、拒絶は時宗一人の心よりせしにあ  
らず、當時彼を輔佐せし多くの人の與り關せし所にして、  
寧ろ國是の然らしめし所と謂ふべきのみ。初め元の我  
に使者を遣したるは、實に文永五年のことなりき。時宗  
年甫めて十八、其の拒絶の獨斷ならざりしや明らかなり。  
爾後元使の相踵いで到るもの數次、十三年を経て弘安四  
年に至り、終に大舉して入寇す。時に時宗意氣正に旺盛、



鑿

恐らくは斷乎たる決心を以て事に臨みしならん。故に一戰して元兵を鑿にしたる、時宗與りて功ありとす。唯十三年間同一の方針なりしは、國論のこれを致ししものとすべし。

恩威

元の好を通ぜんことを求め、而して我のこれを拒絶せしは、稍、穩かならざるに似たれども、彼の國書を閱するに、實に我に於て拒絶するの已むべからざるものありしを見る。其の書や文辭堂々、恩威並び具はる。彼必ず以て我を心服せしむるに足ると爲ししならんも、顧みて我が國の歴史より考ふれば、全然拒絶するの外、他に採るべき策なし。其の、問を通じ、好を結び、以て相親睦せん。といへ

不遜

るは、辭として難すべきものなけれど、我を待つに屬國を以てし、高麗と同一視する態あるは、其の語に明らかなり。彼自ら何の異とする所にあらざりしならんも、我に在りては古來未だ彼の如き不遜の國書に接したることあらず。怒らざらんと欲するも豈得べけんや。當時此の國書を覽し者、一人として其の不遜なるを咎め、且つ憤らざりしはなかりしならん。唯、國土面積の廣狹相懸隔するの著しきによりて、國力を誤信せし者は、圓滑に局を結ぶを利として、開戰に躊躇したらんも、理非は既に明白なりしなり。元主、使者を派して我を促し、我これを斬りて首を梟せしかば、其の怒りて兵を發し入寇せしもの、彼に在

躊躇

梟す



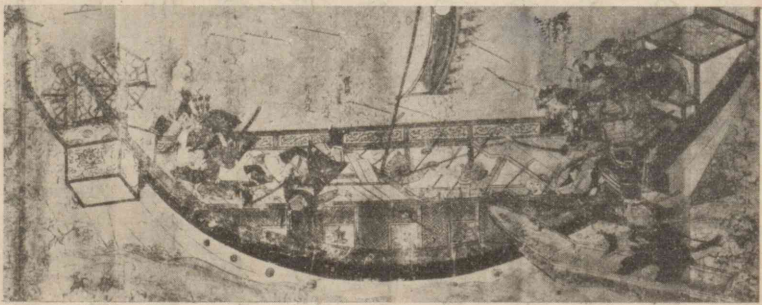
殲滅  
危殆に頻す

りては已むを得ざりし所ならん。則ち已むを得ざりし所ならんと雖も、其のこゝに出でたるは、もと我が國情に通ぜざりしが爲のみ。彼よく我が國情に通ぜしならんには、敢へてこゝに出でざりしなるべし。彼既に開戦に決し、十餘萬の大軍を發して入寇す。一夜颶風忽ち起り、兵船多く覆没す。我が兵これに乗じて襲撃し、殆どこれを殲滅せり。乃ち言ふ者あり、當時若し颶風起らざりしならば、我が國運或は危殆に瀕したりしならん。と言者コトの説にして當れりとせば、即ちかの開戦に決せしは、策の宜しきを得ざりしものと謂ふべきに似たれど、しかも其の言ふ所や實に謬れるの甚だしきものにして、我が開戦

必勝の算

コロンブス  
イタリーのゼノアの  
人、航海家。(西  
曆一四八一年)  
アメリカ發見  
西曆一四九二年。

に決せしは、必勝の算ありて然りしなり。假に颶風起らずして、彼の陸兵皆上陸したりとせば、彼我の勝劣則ち如何。元史に據れば、彼の兵數二十萬と號す。數に於て少なからざれど、かばかりの軍隊を以てよく日本征服の功を擧げ得べきか。元コロンブスの時代は、支那古今を通じて、造船術の最も發達せし時と稱せられ、我に寇せし兵船はコロンブスのアメリカ發見に用ゐしものより、更に堅固なり



(詞繪來製古蒙)

寇 元



兵站

糧を敵に因る  
善用兵者、役不  
再籍、糧不三載、  
取州於國、因糧  
於敵、故軍食可  
足也。(孫子)  
徵發

しと傳へらるれど、其の颶風に遭ひて多く破壊せしに觀れば、以て略、構造の如何を察するに足らん。彼頻りに諸邦を征服せしも、かく多數の兵船を運用せし事は曾てこれ無し。隨つて彼が果して操船に巧なりしやも疑なきを得ず。又十萬・二十萬の軍隊を送遣して其の兵站の連續を過らざること、果して其の能くするを得る所なるか。糧を敵に因るの心算なりしとするも、全軍を支ふるに足るべき食料を徵發するは、頗る困難の業ならずや。若し我に於て、手を拱きて彼の欲するがまゝに従ひしならば、或は徵發に依りて全軍を給養し得たるべきも、これ到底望みて得べからざる所ならずや。

承久の亂  
承久三年(二八二)  
後鳥羽上皇の北條  
氏を滅さんとせら  
れし時の戰亂。

擊摧

鬱勃

管に軍隊給費の難きのみならず、彼我交戦の結果、彼また勝つべからざる運命なりしなり。承久の亂、北條氏の兵畿内を指して西上せし者十九萬人、若しこれに關西の兵を合すれば、數に於て優に元兵の上に出づるを得しや必せり。加ふるに、我は地理に精しく、便利を占むる事亦多し。十萬・二十萬の元兵を擊摧するに於て何かあらん。戰亂を見ざること五十餘年に互りしと雖も、國を擧げて武門の治を享け、武を練ること未だ曾て一日も怠らず。爾後久しきを経ずして、天下麻の如く亂れ、數百年間たゞ戰爭をこれ事とせしもの、決して偶然なりとせず。當時此の鬱勃たる士氣を以て元兵に對す、これを殲滅す



マルコポーロ  
イタリーの旅行  
家、元の世祖に仕  
へ二十餘年間留れ  
り。(西曆二七五—三  
三五)

虞

謬想

るは寧ろ易々たりしなり。且つマルコポーロの記する所に據れば、元兵の大敗せしは、其の兩將の不和に基づけ  
る如し。我が軍の士氣旺盛なるを以てして、彼が主將の  
不和なるに加ふ。單にこれのみを以てすとも、勝敗の數  
すでに明らかなりとすべし。かく、如何なる點より考察  
するも、我、彼を殲滅するの理ありて、彼、我を征服するの虞  
なし。我の斷々として拒絶せる、決して無謀の舉にあら  
ず。神風の加護に頼りて幸に勝ちたりと思惟する如き  
は、謬想も亦甚だしきものなりといふべし。  
龜山上皇の御身を以て國難に代らんと祈らせ給ひし  
はいとも畏し。既に上皇の御身を以て國難に代らんと

目睹

邀擊

鏖殺

醞釀

較著

し給ふを目睹す。國內の民誰か奮つて國に殉ぜんとなせ  
ざらん。これが爲に、上下擧りて國難に當らんと、其の決心  
を固めたるや疑ふべくもあらず。元兵にして上陸し、隊  
を整へて東進し來たりしとせんか、乃ち我が兵の如何に  
勇を鼓してこれを邀擊せしかは知るべきなり。其の海  
上に於けると同じく、これを陸上に鏖殺したるや、必ず  
に難からず。颶風の起りしは幸といふよりも、寧ろ不幸  
といふべし。元兵にして上陸したらんには、我始め多少  
の苦戦あらんも、遂に全勝を制し、更に勢に乗じて高麗を  
略し、かくて漸く醞釀せる國內の紛争を移して、外地の經  
略を事としたりしなるべく、爲に我が日本の獨り較著な



忙殺

る發達を遂げしのみならず、東洋全體亦大いに進歩の見  
 るべきものありしならん。颶風起り、戦はずして勝ちし  
 より、竟に武を海外に用ゐず、徒らに國內の紛争に忙殺せ  
 らるゝに至りしは、洵に遺憾の極みと謂ふべし。  
 元は一敗して後更に再舉を圖らんとせしが、諫むる者  
 ありて、事遂に止めり。智とすべきなり。此の一役に於  
 てすら海岸到る處に造船の音喧しく、爲に費しし所莫大  
 の額なりしと傳ふ。故を以て、若し一敗に懲りずして再  
 舉を圖り、一層の準備を整へて我が國に來寇せしならば、  
 國力の底を傾くるに至りしは疑ふべからず。何ぞ八十  
 年後に分割せらるゝを俟たんや。

（小池十種）

底を傾く

小泉八雲

元英國の人、本名はラフカヂオールン、我が國に歸化し改名す、英文學者、明治三十七年歿、年五十五。

相撲町  
熊本市中の町名。

贓品

### 二四 停車場で

小泉 八雲

昨日、福岡から電報が來て、其處で捕へられた或重罪犯  
 人が、裁判の爲に、今日正午著の汽車で熊本に送られる事  
 を知らせた。一人の警官がその罪人護送の爲に、福岡に  
 出張してゐたのである。

四年前の或夜、一人の強盜が相撲町の某家に入つて、家  
 族を縛つて、澤山な貴重品を奪ひ去つたが、警官の爲に巧  
 に追跡されて、その贓品を賣捌く暇もなく、二十四時間内  
 に捕へられた。併し警察署へ送られる途中、繩を切つて、  
 警官の劍を奪ひ、その人を殺して逃げた。先週までは、そ



れ以上その強盜に就いては何も分つてゐなかつた。ところが熊本の探偵が偶福岡刑務所を見に行つて、その囚徒の中に、彼の頭腦に四箇年間寫眞を焼きつけたやうになつてゐる顔を見つけ出した。看守に對して「あれは誰です」と尋ねた。看守は「此處では『草部』と記入されてゐる竊盜犯です」と答へた。探偵は囚人に近づいて言つた。「お前の名は草部ぢやない。野村貞一だ。お前は殺人の件で熊本へ御用だ。」その重罪犯人は悉く己の罪惡を白狀した。

私は停車場へ到着する重罪犯人を目撃する爲に、大勢の人々と一緒に其處へ行つた。私はこの犯人に對する

憤怒

群集の憤怒を見聞する覺悟をしてゐた。そして犯人に對して、群集の暴力が振はれねばよいがと恐れてゐた。殺された警官は大層人望があつた。今その遺族や親戚は必ずこの群集の中に来てゐるであらう。そして熊本の群集は甚だ穩かであるとは言へない。又私は澤山の警官が警戒してゐるだらうと思つた。併し事實は私の豫想を裏切つた。

汽車は忙しさと騒がしさとのいつもの光景、下駄を穿いてゐる乗客の急ぎ足と、からころと鳴る足音、新聞やラムネを賣らうとする子供の呼聲の裡に停つた。やがて、犯人は警官によつて改札口から押されて出て來た。頭



粗野

を垂れて、繩で後手に縛られた大きな粗野な男であつた。犯人も警官も共に改札口の前に止つた。群集は前に押出して、併し黙つてこれを見ようとした。その時警官は大聲で呼んだ、「杉原さん、杉原おきびさん、來てゐますか。」背中に子供を負うて、私の傍に立つてゐたほつそりした小さい女が、「はい。」と答へて、人混の中を押分けて進んだ。これが殺された人の寡婦で、負うてゐる子供はその人の息子であつた。警官の手の相圖によつて群集は引下つて、犯人と警官との周圍に場所があけられた。その場所に、子供を連れた女が殺人犯人と相面して立つた。その静かさは死の静かさであつた。

寡婦

死の静かさ

仕業

その警官は、少しもその女にはなく、唯子供に對してだけ話した。低い聲であつたが、大層はつきりしてゐて、私はその一言一句をも聞洩らさない事が出來た。「坊ちゃん、これが四年前に、あなたのお父さんを殺した男です。あなたはまだ生れてゐなかつた。あなたはお母さんのおなかにゐました。今あなたを可愛がつてくれるお父さんのおないのは、この人の仕業によるのです。御覽なさい。」こゝで警官は犯人の頸に手をやつて、嚴かにその眼を上げさせた。「能く御覽なさい、坊ちゃん。恐ろしがるには及ばない。厭でせうがあなたの務です。能く御覽なさい。」



畏縮

子供は母親の肩越しに、すつかり開けた眼で、恐れるやうに見詰めた。やがて啜り泣きを始めた。涙を流した。併し畏縮しようとする顔を眞直にして、從順に犯人をじつと見て、見て、見抜いた。

群集の息は止つたやうであつた。私は犯人の顔の歪むのを見た。そして、犯人が繩で縛られてゐながら、突然地上に倒れて、跪いて、其處にゐる群集の心を震はせるやうに、悔恨の情の極まつたしやがれ聲で叫びながら、砂に顔をうちつけるのを見た。「御免なさい、御免なさい。許して下さい、坊ちゃん。そんな事をしたのは、怨があつてしたのではありません。逃げたさの餘り、恐ろしくて氣

悔恨

が狂つたからでした。大變悪うございました。何とも申し譯のない悪い事を致しました。併し私は私の罪の爲に死に行きます、死にたいのです、喜んで死にます。だから坊ちゃん、憐んで下さい、勘忍して下さい。」  
子供はやはり黙つて泣いてゐた。警官は震へてゐる犯人を引起した。沈黙の群集はそれを通す爲に左右へ別れた。それから全く突然に、全體の群集は啜り泣きを始めた。そして日に焼けたその警官が通る時、私は前に一度も見た事のないもの、滅多に人の見ないもの、即ち警官の涙を見た。

田部隆次  
富山縣の人、英文  
學者、明治八年生。

—(田部隆次譯「心」)—



杉田玄白

名は翼、若狭國(福井縣)の人、小濱藩の蘭醫、文化十四年(一八四七)歿、年八十五。

其の翌日

明和八年(一七六三)三月五日骨が原にて解剖のありし翌日

良澤

前野良澤、豊前國(大分縣)中津藩醫。

ターフル・アナトミア

オランダ語にて解剖圖譜の意、解體新書の原本。

翁

玄白。

二五 創始者の苦心

杉田玄白

其の翌日、良澤が宅に集り、前日の事を語り合ひ、先づ彼の「ターフル・アナトミア」の書に打對ひしに、誠に艱難無き



杉田玄白

船の大海に乗り出せしが如く、茫洋として寄るべきなく、唯あきれにあきれて居たるまでなり。さ

れども、良澤豫てより此の事に心を掛け、長崎までも行き、蘭語並びに章句・語脈の間の事も少しは聞き覚え、聞き習ひし人といひ、齡も翁(三十九であつた)などよりは十年の長たりし老輩なれば、これ

内象

を盟主と定め、先生とも仰ぐこととなしぬ。翁はいまだ二十五字さへ習はず、不意に思ひ立ちしことなれば、漸くに文字を覚え、彼の諸言を習ひしことなり。 偕、此の書を読み、如何やうにして筆を立つべきかと談じ合ひしに、「とても初より内象の事は知れ難かるべし、此の書の最初に仰伏全象の圖あり。これは表部外象の事なり。其の名處は皆知れたる事なれば、其の圖と説の符號とを合せ考ふることは、取りつき易かるべし。圖の初とはいひ、かたゞ先づこれより筆を取り始むべし」と定めたり。即ち解體新書形體名目篇これなり。其の頃は、助語の類も何れが何やら心に落ちつきて辨へぬことゆ

解體新書

我が國最初の西洋解剖學翻譯書、安永三年(一八〇四)刊行。



彷彿

え、少しづつは記憶せし語ありても、前後一向にわからぬ事ばかりなり。譬へば、眉といふものは目の上に生じたる毛なり。といふやうなる一句、彷彿として、長き春の一日には明らめられず。日暮るゝまで考へ詰め、互に睨み合ひて、僅か一二寸の文章、一行も解し得ざる程にてありしなり。

又或日、鼻の所にて、「フルヘッヘンドせしものなり。」とあるに至りしに、此の語わからず。これは如何なる事にてあるべきと考へ合ひしに、いかにもせんやうなし。其の頃辭書といふものなし。やうやく長崎より良澤求め歸りし簡略なる一小冊子ありしを見合せたるに、「フルヘッ

聚集

連城の壁  
「惠王之珠、光能照乘、和氏之璧、價重連城。」  
(成語考)

ヘンド」の譯註に、「木の枝を斷ちたる跡、其の跡『フルヘッヘンド』をなし、又庭を掃除すれば、其の塵土聚り、『フルヘッヘンド』す。」といふやうに讀み出せり。これは如何なる意味なるべきかと、又例の如くこじつけ考へ合ふに、辨へ兼ねたり。時に翁、思ふに木の枝を斷りたる跡癒ゆれば堆くなり、又掃除して塵土集ればこれも堆くなるなり。鼻は面中に在りて堆起せるものなれば、『フルヘッヘンド』は『堆し』といふ事なるべし。然れば此の語は『堆し』と譯しては如何。と言ひければ、各、これを聞きて、「甚だ尤もなり。『堆し』と譯さば、適當なるべし。」と決定せり。其の時の嬉しさは、何にたとへん方もなく、連城の壁をも得し心地せり。



シンネン  
オランダ語、精神  
の意

此の如き事にて、推して譯語を定めたり。其の數も次第次第に増しゆくこととなり、良澤の既に覺え居し譯語書留をも増補しけるなり。其の中にも、<sup>\*</sup>シンネンなどいへる事出でしに至りては、一向に思慮の及び難き事も多かりき。これらは、亦ゆくゆく解くべき時も出て來ぬべし、先づ符號を附け置くべし。とて、丸の中に十文字を引き、記し置きたり。其の頃知らざる事をば、「響十文字」と名づけたり。每會いろくりに申し合はせ、考へ案じて、解すべからざる事あれば、其の苦の餘り、それも亦、「響十文字」と申したりき。然れども、爲すべき事は固より人にあり、成るべきは天にあり。の喩の如くなるべしと、此の如く思

解屍  
同臭の人

を勞し、精を研り辛苦せしこと一箇月に六七回なり。其の定日は怠りなく、わけもなくして各相集り、會議して讀み合ひしに、實に、「不味者は心」とやらにて、凡そ一年餘も過しぬれば、譯語も漸く増し、讀むに隨ひ自然と彼の國の事態も了解するやうにて、後には其の章句の疎あまき所は、一日に十行も、其餘も、格別の勞苦なく解し得るやうになりたり。尤も每春參向の通詞どもへも聞き糺せし事もあり。又其の間には、「解屍の事もあり、獸畜を解きて見合せし事も度々なりき。」  
此の會業怠らずして勤めたりし中、次第に同臭の人も相加はり寄り集ふこととなりしが、各志す所ありて一様



ならず。翁は一たび彼の國の解剖の書を得、直ちに實驗し、東西千古の差あることを知り、明らめ、治療の實用にも立て、世の醫家の業にも發明ある種にもなしたく、一日も早く、此の一部を用立つやうになし、見たしと志を起せし事ゆゑ、他に望む所もなく、一日會して解する所は、其の夜翻譯して草稿を立て、それに就きては、其の譯述の仕方を種々様々に考へ直せし事、四年の間に草稿は十一度認めかへして板下に渡すまでに至り、遂に解體新書翻譯の業成就したり。

抑、江戸にて此の學を創業して、腑分と言ひ古りし事を新に解體と譯名し、且つ社中にて誰言ふとなく蘭學とい

板下

腑分

嚙矢

へる新名を首唱し、日本國中の通稱ともなるに至れり。これ今時の隆盛を致せし嚙矢なり。今を以て考ふれば、これまで二百年來、彼の外科法は傳りしなれども、直ちに彼の醫書を譯するといふ事は絶えてなかりしが、此の時の創業、不思議にも凡そ醫道の大經大本たる身體内景の書にて、これが醫書新譯の起り始めとなりしは、不用意を以て得し所にて、實に天意とやいふべき。

(蘭學事始)

蘭學事始  
二卷、杉田玄白著  
「解體新書」翻譯の  
苦心及び當時の蘭  
學興隆の機運を語  
りしもの。



二六 新聞の話

鈴木文史朗

鈴木文史朗  
名は文四郎、銚子  
市の人、東京朝日  
新聞整理部長、明  
治二十三年生。

本能

自衛上

酋長

人間には、自分の住んで居る處の周圍に起きる事件を早く知りたがり、又それを知つた場合は、すぐ他人にこれを知らせたがる本能があります。人類が太古野蠻な時代に、山間・原野に部落を作つて、鬭争しながら生活して居た時代でも、隣の部落にどういふことが起りつゝあるかを知ることは、興味の上からばかりでなく、彼等にとり自衛上最も必要であつたに相違ありません。隣の部落の酋長が死んだとか、急に弓矢を澤山作つたとかいふやう

ヤハン  
ジエイ  
ミエウ  
チヨウ

實質的

中葉

なことを知つた者は、それを直ちに自分の仲間にも觸廻つて歩いたことは容易に想像されます。新聞の發生は、かうした人間の本能に基づくものであります。人間が文字を使用し始めた時は、實質的には現代の新聞の第一號が、何等かの形で、例へば個人間の手紙とか、政府の告示とか、現れ出した時であり、十五世紀の中葉に印刷術がドイツで發明された時は、現代の新聞の形態を持つた新聞が現出する豫告の時でありました。

現代の新聞は、イタリー・ドイツ・イギリス・フランス等で、十六世紀の中葉頃から漸次發達し出したものでありま



週刊

す。その創始時代には、何れも週刊の形で發行され、紙面にはその發行都市を中心として起きた政治上の事件などを主として、聞くがまゝ、見るがまゝ、思ふがまゝ、書きつらねるといふ程度のものでありましたが、その後世界各國の進歩變轉は同時に各國の新聞を異常急速に發達せしめ、遂に今日のやうに、二十世紀は一面に於て新聞の時代といはれるまでになつたのであります。

機構

日本でも明治維新と共に、現代新聞の機構は西洋文明の一つとして輸入され、今日では日本の大新聞は世界でも第一流の域に達し、歐米人を驚歎せしめてゐる實況にあります。

メコウ

二

庶民階級  
知識慾  
普遍化

新聞は大體以上に述べたやうな理由で發生し、發達して來たのであります。その發展は十九世紀の中頃以後に於て、殊に目覺しいものがあります。その最大の原因は、この期間に世界何處の文明國でも、教育が庶民階級にまで一般に普及され、人間の知識と知識慾とが全體的に向上し、讀む習慣が普遍化された爲であります。

昔は何處の國でも、讀んだり書いたりすることの出来るものは、少數の知識階級に限られたものでしたが、それが殆ど誰でも出来るやうになつた結果、何處の國でも國民の大多數が新聞を要求するやうになりました。この

フヘニカ  
カイン  
タニキ  
フヘニカ



報道

結果、注目すべき現象が新聞の發達の上に起りました。といふのは、新聞が少數の知識階級のみに讀まれてゐた時代は、政治や外交などの國政を主とした事件の報道とか、殊にそれに關する意見を中心としたものであつたのが、讀者の層が一般庶民階級にまで擴がつた結果、新聞が取扱ふ事件の範圍は、著しく擴大されるに至りました。國家社會の各方面に起さる日常の事件で、それが讀者に直接間接何等かの利害關係があり、或は興味を惹くものであれば、新聞はさうしたニュースの報道に全力を注ぐやうになりました。即ち、昔は、政治・外交等國政に關した記事や、それに關する論說等に主力を注いで居たもの

ニュース

ハニキ

不文律

意識的

警句

が、今日では、何を措いても、ニュース第一といふのが、全世界を通じて新聞の不文律のやうになつて居ります。この新聞紙の使命の變遷は、新聞の製作者が故意に或は意識的にやつたからではなく、前に述べたやうな理由で、時代の變ると共に變つて來たものであります。だから、現代の新聞記者は、意見を述べたり、批評したりする前に、先づ第一にニュースを捉へてこれを最も敏速に報道することが、最初の任務となつて居ます。昔の新聞記者は筆で書いたが、今の新聞記者は脚で書かねばならぬといふのも、現代新聞のニュース第一主義をいひ現した警句であります。

コイ  
ヒミコウ  
トスル

ケイ



定義

風教  
具體的

さて、それなら、新聞の生命とされるニュースとは何ぞやといふことが、常に新聞の研究者により問題とされて居ます。これに關し、無數の書物が書かれ、議論が出てゐて、一定した定義はありませんが、大掴みにいへば、

一、實際に起きた事件で、日常平凡なことではなく、その發生が、時間的には新しく、地理的には近いこと。そして發表が時機に適して居ること。

二、出来るだけ多くの讀者に利害關係があり、興味を與へ、且つ風教上に悪影響なきこと。

これを具體的にいへば、根據のない想像は、それが如何

三

エニカク  
ネツ  
オ

に珍奇なものでも價值はありません。又、毎日の新しい事實例へば太陽が東から昇り西に没するといふことは、人類にとり恐らく日毎の最も重要な事實であります。それは日常平凡なことであるから、ニュースにはなりません。猫が鼠を噛殺したといふことも報道の價值はありませんが、その反對のことが起きたら、すばらしいニュースであります。

又、如何に現實に起きたこと、珍らしいことでも、それが餘り古いことであつたり、遠隔の地の出來事であつたり、風教上に悪いことは價值がありません。四國の人には、北海道の千戸の火事よりも、自分の近くの十軒の火事の



政變  
國際會議

方が大きなニュースです。昨年南アフリカの山中で五本脚の猿が発見されたといふことよりも、昨日丹波の山中で三本脚のを捕へたといふ方が、日本の新聞の讀者には二倍の興味があります。そして、この興味の有る無し、或はその程度の大小を判断するには、そのニュースがどれだけ多くの讀者により熱心に讀まれるかを判定することによつて決るのであります。今朝、或は昨日起きたといふ政變・總選舉・國際會議の決定・殺人事件・大地震・水害等の記事などが、新聞により常に大きく扱はれるのは、この爲であります。

四

蒐む

大體かういふ標準の下に、新聞のニュースは蒐められ、編輯されるのであります。新聞の誇とするのは、速報といふところにありますので、それが爲には大新聞社に於ては、その國に於て可能なあらゆる設備が用意され、又常に改善されつゝあります。分業と大量生産とは現代産業の一大特徴であります。大新聞社の組織はその代表的なものであります。ニュースを蒐める爲には、編輯局があり、そこでは政治部・經濟部・社會部・外報部・外國或は外交關係のニュースを扱ふ、地方通信部・地方のニュースを扱ふ、寫眞部等をはじめ、それら幾つかの部門があつて、各専門的に材料を蒐め、蒐つたニュースを編輯局整理部

キヨク  
ハニミフ  
○

アツめ  
トヨウジ  
ニン



セニク

選擇

紙型

現像



編輯部の一

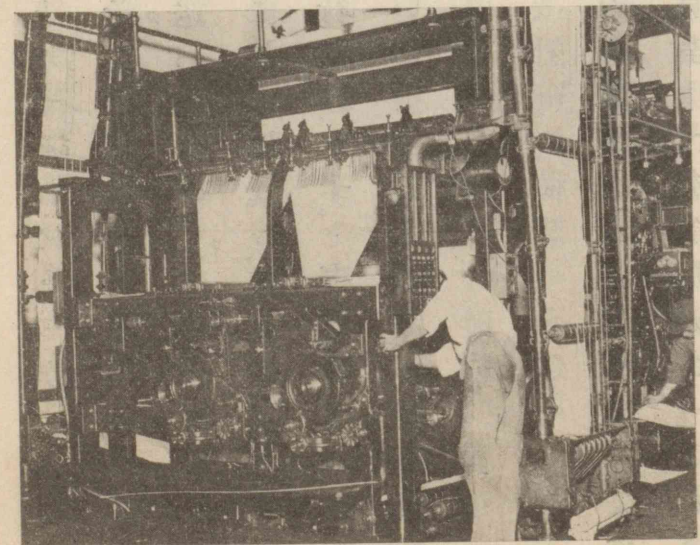
ともいふでこれを取捨選擇し見出しを付けて印刷部へ廻し、そこでは直ちにこれを活字に組み、紙型にとり、現代高速度印刷の最高峯ともいふべき輪轉機により、一時間十萬枚以上の速度で印刷されます。そこから新聞が印刷されて出て来る光景は、文字通り急流の奔出するが如きものであります。

ニユースを原稿用紙に書き、寫眞を現像室に持運んで

クモ

通信網

から、それが新聞に印刷されるまでは、急ぐ場合は二三分しか要しません。かうして敏活を期する爲には、ニユースをとり、これを急送する爲に、大新聞社では飛行機・傳書鳩・寫眞電送機等最新科學のあらゆる設備が活用され、又、國內と國外とを問はず、重要な都市に社員を常置して、蜘蛛の巣を張る如く所謂通信網



輪轉機



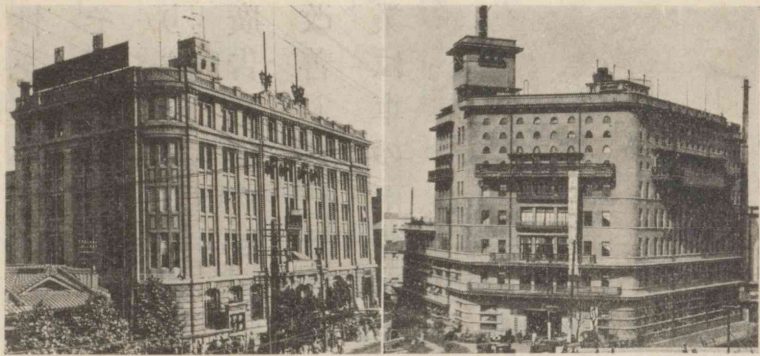
を張つて、ニュースは細大となくそれに引つかゝるやうに工夫されてあります。そこで得られたニュースは、電話や電信で刻々に本社に送られるので、本社には常に夜でも宿直員が居て絶えずこれを接受し、重大なニュースは、何時でも號外として發行されます。事實晝夜の別なく一年中活動して居るといつてもいいのは、新聞社であります。

五

この外、新聞社には營業の方面があることを忘れてはなりません。即ち編輯局に對して、營業局があり、これは大體販賣部と廣告部とに分れて居ります。販賣部は新

ハンバイブ

公機



大坂毎日新聞社

東京朝日新聞社

聞を賣擴め、讀者の手に配達して、その代金を集めるのを仕事とします。廣告部は新聞へ載せる廣告を集めるのが任務で、新聞がその用紙と大した相違のない安い値段で賣れるのは、この廣告による収入利益があるからであります。日本の大新聞では、販賣と廣告とによる収入利益は各半ばして居ます。健全な新聞は常に獨立した言論報道の公機であります。その獨立

コウキ



幫助

性を保つ爲には、何者の幫助にも與らないことが必要で、それには營業として能率を擧げることが必要なのであります。よき新聞はよく賣れ、よく賣れる新聞は多くの廣告を集め、この収益によつて益、よき人材を集め、設備を改善して行けるので、この意味で、新聞社にとり、編輯と營業は車の兩輪のやうな關係にあるといへます。

ハウシヨ

二七 國史に返れ

徳富蘇峰

徳富蘇峰 名は猪一郎、熊本縣の人、評論家、歴史家、貴族院議員、帝國學士院會員、文久三年(五三三)生。

國史に返れ。國史は大和民族の系圖である、吾人祖先の功科表である、日本國民の經典である。日本國を知るには、歴史を透して知るより他に方便がない。國史は實に忠實なる案内者、信賴すべき指導者である。

吾人は歴史的に考慮せねばならぬ。總ての人類は平等觀よりすれば、皆同胞である。されど、歴史觀よりすれば、總ての國は皆特殊の性格を具へてゐる。甲國と乙國とは同じでなく、乙國と丙國とは違ひ、而して丙國と甲國も亦同じでない。十箇國あれば十箇國の、百國あれば百

ユウカ  
ヒヨウ  
クイセン

考慮  
平等觀  
歴史觀



意義  
本義  
干涉  
自主

把持

所作

總括

國の差異がある。この特殊の國性を維持する上に於て、始めて獨立國の意義が完うされる。獨立國の本義は他の干涉を絶ち、我が自主の體面を保つのみではなく、精神的に自主であらねばならぬ。詳かにいへば、精神的に自國の國性を把持し、保持し、開展し、發達させねばならぬ。我が大和民族の誇は、國史である。この中には、必ずしも悉く正しい事、善い事のみが満ちてはゐない。必ずしも悉く敬ふべく、仰ぐべき事のみが溢れてはゐない。人間は決して神様ではない。人間の所作には、様々の過失もあれば、罪惡もある。されど、總括していへば、國史は大和民族の光榮史である。

取厚史

カニシヨ  
ウ

のハツ  
ジ

する。

ソウカン

イロゲン

護國の精神

盛徳

剴切

背景

如何に我が皇室が世界に比類なき有難い皇室であるかは、國史が最も雄辯に語つてゐる。如何に我が國民が一旦緩急の際に處して、護國の精神の猛烈に且つ勇敢であつたかは、國史がその證人である。如何に大和民族の中に世界的偉人と比較して、一步も劣らぬ者を生じたるかは、長き年代の中に屢々接觸する所である。即ち我が明治天皇の盛徳大業も、國史の背景によつて始めて明白に、精詳に、剴切に會得することが出来る。即ち五箇條の御誓文の如きも、國史の背景なきに於ては、只一種の雄快なる文書たるに止まる。帝國憲法の如きも、國史の背景なきに於ては、單に乾燥無味なる一部の法文に止まる。

か  
セツ



戀舊思想  
保守退嬰  
架空浮誇

閑却

株守

失墜

醉生夢死

凡そ固陋頑冥の戀舊思想や、保守退嬰の島國根性や、若しくは架空浮誇の摸倣精神は、いづれも我が國史を閑却したる爲といふを適當とする。現状を株守するも國史を知らぬが爲、現狀に不安なるも國史を知らぬが爲、國民的自信力を失墜するも國史を知らぬが爲、自惚根性にて醉生夢死するも國史を知らぬが爲ではないか。國史に返れ。とは、總ての國民が歴史家となれといふのではない。只、日本國民として、國史の大いなる筋道を諒解せよ。といふのである。國史は、日本の精神的寶藏である。苟くも國民的に生活し且つ活動せんとせば、先づこの寶藏に向つて總ての物を求めるがよい。

(國民小訓)

コトウカチ  
レンキワミシ  
ホミミチチ  
カクウツク

ウヌボレ

スイセイ  
ムシ

スガミチ

レウカネ

上田萬年  
愛知縣の人、國文學者、文學博士、昭和十二年歿、年七十一。

精神的血液

標識

二八 自國語

上田萬年

言語は、これを話す國民にとりては、恰もその血液が肉體上の同胞を示すが如く、精神上の同胞を示すものにして、これを物に譬ふれば、日本語は日本人の精神的血液なり。といふことを得べし。日本の國體と日本の人種とは、實にこの精神的血液を以て維持せられ、結合せらる。言語はその國民の標識となるのみならず、これと同時に、また一種の教育者即ち情深き母ともなるなり。我等の生るゝやいなや、この母は我等をその膝の上に迎へ取り、懇ろに國民的思想と國民的感動とを教へ込みくる。

ネニコト

ハウニキ

タフ  
はい



なり。されば、この母の慈愛は、まことに天日の如しといふべきなり。苟くもこの國に生れ、この國民たり、この國民の子孫たるものは、誰かこの光を仰がざるべき。

言語には、我等が心中に一日も忘れかぬる生活、殊に人生の神代ともいひつべき小兒の頃の記念が結合せられるものと知るべし。我等が幼かりし頃、終日の遊に疲れはてて、すやくと眠に就かんとする折、母君はいかに優しき聲にて「寢よ。」との歌を歌ひ給ひしか。頑是なき子供心に悪ふざけなどしてうち廻れる時、厳しき父君はいかに嚴かに教訓を垂れ給ひしか。さては、春の麗かなる野邊に友だちとげんげなどを摘歩き、あるは、秋の日赤き

頑是なし

ガンゼ

ハニエ  
オニエ  
カニエ

恩澤

垣根の下に、餘念なく栗の實を拾ひしその當時より用ゐ來たれる言語は、當時の人名、當時の地名と共に、何とも言はれざる快感を我等に與ふるなり。次には小學校、中學校の言葉、次には學生の言葉、或は市民としての言葉、或は職業により、階級により、地方によりての言葉など、皆それぞれ、或は外國人の學校にて外國語の教育のみ受けたる人ならざる限りは、この言語の恩澤を蒙り、この言語に感謝の意を表せざるものはなかるべし。

されば、國民がその國の言語を尊ぶことは一の美德にして、偉大なる國民は、必ずその自國語を尊び、決してこれ



ハチ

オカシロ  
にす

シユ  
ユ

觀念

蔑にす

須臾

を措きて他の國の國語を尊崇せず。情の上より自國語を愛し、理の上よりその保護改良に従事し、以て眞正の國民を養成せんことを力む。凡そ何れの國を問はず、苟くも國家的觀念の上より、その國民の一員たるに愧ぢざる人物の養成を以て目的とする以上は、先づその國の言語、次にその國の歴史、この二つを蔑にしては決して效を收むること能はず。これ國民たる者の須臾も忘るべからざることなり。

（國語のため）

カウ  
ン

鴻恩

嘉納治五郎  
甲南と號す、兵庫  
縣の人、教育家、  
貴族院議員、萬延  
元年（三三〇）生。

黑白を辨ず

二九 死して惜しまるゝ人となれ 嘉納治五郎

人生れて呱呱の聲を發するより、長じて一個の成人となり、自營自活して世に立つに至るまで、他より受くる所の恩徳一ならず。これを近くして、まづ父母の鴻恩あり。我等の生るゝや自營の道を知らず、自活の道を知らず、ただ泣くことを知り、笑ふことを知るのみ。この間晝夜を問はず、寒暑を論ぜず、心身の疲勞を忘れ、千辛萬苦以て我等を保育し、以て我が成長を遂げしむるものは、豈我等の父母にあらざや。これに次ぐに師長の恩あり。我等が僅かに黑白を辨ずる頃より、長じて社會に出づるに至る

二九 死して惜しまるゝ人となれ



誨ふ

まで、我に誨ふるに事理を以てし、我に説くに道德を以てし、必要なる學術上の知識を授け、身體保全の法を講ぜしめ、我等をして將來世間に獨立する基礎を成さしむるものは、豈我等が師長にあらずや。

宏大 機關 福祉 不逞 薰陶 塗炭の苦

更に又至尊及び國家の恩あり。至尊は仁慈なる大御心を以て臣民を愛撫し、宏大なる聖徳を以て國家を統治し給ひ、國家各種の機關は生民の安寧を維持し、その福祉を増進し、兇惡を正し不逞を罰し、以て我が父母師長をして我等に對する慈愛薰陶の務を完うせしめ、又我等をして危難を憂へずして安全なる發育を遂ぐるを得しむ。然らずんば、我等は亂離塗炭の苦に陥らん。我等の安全

光陰

老い

醉生夢死

なる發育を遂げて一個の成人となるは、實に此等數者の恩あるに由る。然らば則ち我等が成人の後に於て、此等數者に酬ゆるは人間當然の義務にあらずや。

然れども人間の生涯は實に區々たり。或はその修養の時期に當りて、懶惰遊蕩の間に貴重なる光陰を送り、體軀徒らに長じて、當に自營自活以て我が生育の恩に報ゆべき時に至るも、無爲無能、その父母の恩に報ゆること能はず、その師長の恩に酬ゆること能はざる者なり。況や國家が生を成す所以に酬ゆることをや。朝に起きて而して食ひ、夕に食うて而して眠る。かくの如くにして老い、かくの如くにして死す。これ所謂醉生夢死する者に



トシク

蠹賊

ヒエキ

裨益

ワヅかに

リユウフヲ  
イイン

流風遺韻

テシブ

畢生

して、實に國家の蠹賊、人間の最下なるものなり。  
 又その無能かくまで甚だしきに至らず、何等か一種の  
 事に従ひ、國家に對して多少の裨益をなし、以て自活の道  
 を求め、僅かに父母を養ひ、自ら衣食して一生を送る者は、  
 これを前の醉生夢死する者に比すれば、勝ること萬々な  
 りと雖も、かくの如きは纔かに自ら受くる所の恩に酬ゆ  
 るに過ぎずして、その一生の經營事業の永く後世に徳し、  
 その流風遺韻の遠く子孫を動かすに足るものなし。か  
 くの如きは我等の理想とすべき所にあらず。  
 我等は人間天賦の能力を善用し利用し、その畢生の事  
 業は以て我等が父母・師長・國家・社會に負ふ所の鴻恩に酬

ヨシウ

綽々

ミヤクシヤ  
ワク

餘澤

ヨクク

ミシ  
コウコク

闔國

い得て更に餘裕の綽々たるものあり、後世子孫をして永  
 くその餘澤を受けしめ、國家は我等を得て一段の進歩を  
 なしたることを、長へに追憶せしめんことを期すべし。  
 我等が前途有爲の少壯諸子に待つ所のものは、實にこれ  
 に外ならず。  
 それ生きて一郷の爲に功ある者は、死して一郷の爲に  
 惜しまれ、一郡の爲に盡せる者は、一郡の爲に哀しまる。  
 若しそれ、そのなす所至尊の聖治を贊し、國家の進歩を助  
 成し、その忠誠よく闔國民に認めらるゝ者に至りては、そ  
 の事業の何たるを問はず、その人の存否は、國家の進運に  
 關すること甚だ大なるものあり。こゝを以てその人一

二九 死して惜しまるゝ人となれ



遼遠

悼惜

度逝くや、國を擧げてこれを惜しまざるはなし。嗚呼天下の廣き、逝く者は日夜にこれあり、而してその死の天下に知らるゝ者果して幾人かある。

少壯の諸子よ。諸子の前途は遼遠なり。遼遠なりと雖も、一生の覺悟は即ち今日より定め置かざるべからず。知らず、諸子は死して人に顧みられざる人とならんとするか、一郷一郡の爲に惜しまるゝ人とならんとするか、抑亦舉國の悼惜を受くる士とならんと欲するか。 (國志)

新編國文讀本 改制版 卷四終

サ	カ	下	上	下	上	四	ラ	ナ	活用	サ	カ	下	上	四	活用	サ	カ	下	上	四	活用	サ	カ	下	上	四	活用
變	變	一段	一段	二段	二段	段	變	變	文	行變格活用	カ行變格活用	下一段活用	上一段活用	四段活用	口	行變格活用	カ行變格活用	下一段活用	上一段活用	四段活用	文	行變格活用	カ行變格活用	下一段活用	上一段活用	四段活用	口
爲	來	蹴	著	受け	生き	行か	有ら	死な	未然形に	爲	來	受け	著	行か	未然形に	爲	來	受け	著	行か	未然形に	爲	來	受け	著	行か	未然形に
り						す		る						せれる						せれる						せれる	
	さす		らる																								
			しむ	じすむ																							
爲	來	蹴	著	受け	生き	行き	有り	死に	連用形に	爲	來	受け	著	行き	連用形に	爲	來	受け	著	行き	連用形に	爲	來	受け	著	行き	連用形に
				ぬ										ぬ						ぬ						ぬ	
			たけむ	たり	つり	き*																					
爲	來	蹴	著	受け	生き	行く	有り	死ぬ	終止形に	爲	來	受け	著	行	終止形に	爲	來	受け	著	行	終止形に	爲	來	受け	著	行	終止形に
				なり(詠歎)	らしむ	まじ								たい						たい						たい	
爲	來	蹴	著	受くる	生くる	行く	有る	死ぬる	連體形に	爲	來	受ける	著る	行く	連體形に	爲	來	受ける	著る	行く	連體形に	爲	來	受ける	著る	行く	連體形に
						なり(詠歎)																					
				なり(指定)																							
爲	來	蹴	著	受け	生き	行	有	死ぬ	已然形に	爲	來	受け	著	行	已然形に	爲	來	受け	著	行	已然形に	爲	來	受け	著	行	已然形に
れ	れ	れ	れ	れ	れ	け	れ	れ		れ	れ	れ	れ	れ		れ	れ	れ	れ	れ		れ	れ	れ	れ	れ	

(よう、まい、ないはサ行變格活用動詞の未然形しの方に、られる・させる・ぬはせの方に連続する)

(きには特例あり)

タラセヌ  
レウエン  
ソク



口語動詞活用表

種活用類の	語幹				尾
	未然	連用	終止	連體	
行	か	き	く	け	け
死	な	に	ぬ	ね	ね
有	ら	り	る	れ	れ
起	き	き	きる	きれ	きれ
(着)	き	き	きる	きれ	きれ
兼	ね	ね	ぬ	ね	ね
(蹴)	け	け	ける	けれ	けれ
(來)	こ	き	くる	くれ	くれ
(爲)	し	し	する	すれ	すれ

文語動詞活用表

種活用類の	語幹				尾
	未然	連用	終止	連體	
行	か	き	く	け	け
死	な	に	ぬ	ね	ね
有	ら	り	る	れ	れ
起	き	き	くる	きれ	きれ
(着)	き	き	くる	きれ	きれ
兼	ね	ね	ぬ	ね	ね
(蹴)	け	け	ける	けれ	けれ
(來)	こ	き	くる	くれ	くれ
(爲)	し	し	する	すれ	すれ

口語形容詞活用表

種活用類の	語幹		尾
	未然	連用	
清	く	く	い
涼	く	く	い

文語形容詞活用表

種活用類の	語幹		尾
	未然	連用	
清	く	く	き
涼	く	く	き

助動詞活用一覽表

種類	口語					文語					
	未然	連用	終止	連體	已然	未然	連用	終止	連體	已然	命令
受身	られる	られ	られる	られる	られ	られる	られ	られる	られる	られ	られ(よ)
可能	れる	れ	れる	れる	れ	れる	れ	れる	れる	れ	れ(よ)







中學明善校  
二五  
羅番  
藤井保

昭和十二年五月二十六日印  
昭和十二年五月二十九日發  
昭和十二年十二月十日訂正再版印刷  
昭和十二年十二月十三日訂正再版發行

新編國文讀本 改訂版  
定價 卷一—六 各金六拾錢  
卷七—十 各金五拾八錢



編者 千田 憲  
發行者 塚田 六彌  
印刷者 白井 赫太郎  
印刷所 精興社  
東京市本郷區駒込千駄木町二百七十九番地  
東京市神田區錦町三丁目十一番地  
東京市神田區錦町三丁目十一番地

發行所

東京市本郷區駒込千駄木町二百七十九番地

右

文書院

電話駒込(82)二五八〇番  
振替口座東京七四五二八番

大賣捌 東京 林平書店 大阪 柳原書店 名古屋 敎生社 久留米 金文堂



不次子公晴来妹以烟

三系許誇樹葉後半如餘

赤やけはわらうさるうしよ

うらみのわらうさるうしよ

中學明善校

二五

藤井保

けら、後みよるわい

すのやまこゆまは

三石  
允